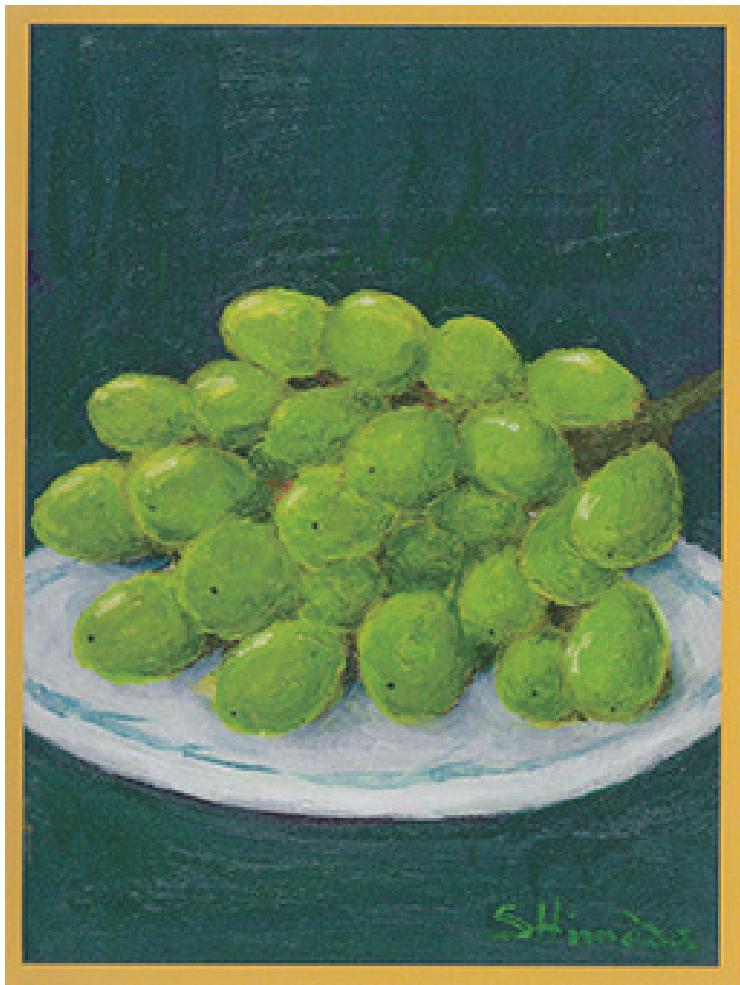


# 冬雷

短歌雑誌

TOURAI



二〇二六年一月一日発行（毎月一回一日発行）

第六十五巻第一号

（通巻七六八号）

2月号・2026年

## 土屋文明先生の色紙

このほどいつも活用させて貰うネットの「日本の古本屋」様を通して素晴らしい色紙を手に入れた。

松の間の雨にほへる山ざくら花

は皆これ木花之

開耶姫

文明

松の間の雨にほへる山ざくら花は皆これ  
木花之このはなさく開耶姫やひめ

（『続々青南集』所収）

昭和四十六年の作である。この幸運、会員の皆様と共に  
有したい。

（編集室）

松の間の雨に  
ほへる山ざくら花  
は比白ひしらこれ木花之

開耶姫 文明

## 2026年2月 目次

冬雷集	1
作品一	24
二月集	40
作品二	58
作品三	66
十二月号冬雷集評	桜井美保子 16
十二月集 / 残響集評	鈴木やよい 17
大友柳太朗と美空ひばり（最終回）	大山敏夫 18
美空ひばりの文学的才能	高橋輝次 21
十二月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 38
第64回 冬雷大会詠草（短評付き）	44
全国大会に参加して	河原本光子 44
相互選第一位の「赤間洋子様の作品とお人柄」	大山敏夫 49
十二月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 54
十二月号作品三評	山本三男・橘 美千代 56
十二月号十首選（冬雷集・十二月集 / 残響集）	66
十二月号十首選（作品一・作品二・作品三）	68
歌集 / 歌書御礼	（編集室）佐藤靖子 71

# 冬、雷集

熊の母子

大山敏夫 埼玉

照葉峠へむかふ川沿ひ車のまへ熊の現るか黒き熊が

巨大なる熊ではないがその躰くろぐると照る美しきまで

熊はすぐに森へと隠れくまモンのやうなる子熊その後を追ふ

逃げ込みてこちら窺ひゐるならむ森の藪のなか熊の母子は

この辺り幼き子らと川遊びせしこと思ふとほき夏の日

人間の親子の谷川遊びするところなら熊の母子も来るか

ここならば月の輪熊か熊ほど凶悪ならずと言ふしやうもなきこと

すでに我らにしたがふ子らの無きことを思ひ出でて熊の母子をおもふ  
さうですかやはりゐましたかといふかほす宿に来て熊を見たと話せば

赤間洋子 東京

三十年通ひ続けて学びたる更紗染めは我が生甲斐のひとつ

転居して遠くなりても稽古日は早昼食して工房に向かふ

十数枚の型紙用ひて摺り重ね模様が次第に完成してゆく

配色を変へれば型紙同じでも雰囲気異なる布が仕上がる

眼が悪く失敗多き我が作品でも師匠は優しく評価してくれる

習ひはじめの布にて作りしブラウスはまだ捨てられず箪笥の中に  
我が染めた更紗の布で縫ふエプロン卒寿祝ひの返礼として

兼 目 久 栃木

中国へ行きし時に見たりけりビルのまはりに竹をまきつつ  
年末のハガキ受け取る奥さんより故人のあるじの笑顔なつかし

水中に咲く芹の花をなびかせて清き水にゆらぎ見ゆるも

空海の風信帖を見るにつけ飽くなき書品に我を励ます

力強く氣力満ち満ちてさはやかなり風信帖は吾が書の指針

さはやかなり「高貞碑」に魅せられて「冰壁」の言をこの筆法で書す

白菜を真二<sup>まつぶ</sup>たつに切り中を見れば全面黄色妻が喜ぶ

人間の生活圏に入りたる熊の侵害人間を襲ふ

森 藤 ふみ 東京

縁日の歩道の端に花の苗盆栽並べる店二軒あり

珍しく鉢植ゑの花買ふと娘はシクラメンとゼラニユウム選ぶ

百均に土を求めてポットより苗を移して日当たりに置く

急激な寒波に夜は部屋に入るゼラニユウムとシクラメンの鉢

母の描く画材にせむと鉢の花あれこれを買ひ世話をしたりき

来るたびにシモバシラと札の立つ枯れたる茎をじつくりと見る

枯れ色の直ぐ立つ茎の先端に白き小花の集まり咲けり

シモバシラの花をやつと見られたと気持ちうきうき園内巡る

並び立つ皇帝ダリア花びらの散りゆき黄の実大きく揺れる

以前より

櫻井一江 東京

三十年余続き来たりぬ会の友日本橋在住者の多きに気付く  
「葛重」のドラマに推されこの年の研修は地元の日本橋にしたり

小学校の廃校利用の一室に「葛重ギャラリー」の展示明るし

廃校を惜しみて友は十思小のPTA役員の若き頃語る

以前より大きくなりて葛重の「耕書堂」跡地の案内板の輝き

晴天下銀杏の黄葉を避けながら日本橋界隈のスタンプラリーにも  
「小津和紙」へ向かふ道べに大いなる浮世絵われらを招くが如し  
手漉き和紙十余の工程経るビデオじつくり見つつ再認識の和紙

有 泉 泰 子 山梨

妹より吾が歌載らず元氣かとメールのありて心くつろぐ

歌詠むを忘れてをりし吾のみて真白な頭にしめきり近づく

欠詠はするなと父との約束をつひに守れず笑顔にあやまる

久々に川原を歩きぬゆつくりと東西南北山々を見て

若き日に父登りしといふ甲斐駒の雄々しく立ちをり青空の下

青木 初子 神奈川

我が家に向きては二つの窓のみに隣の室音聞こえず静か  
幼き子二人育てる隣より聞こえては来ず子を叱る声  
防音の建材の質上がりしか四軒増えても路地静かなり

隣家の壁高く陽の届かざる庭内の椿一本伐りたり

育ちつつ硬くなりたるドゥダンツツジ暑きこの夏剪る時季失ふ  
花咲かぬドゥダンツツジ三本の育ちの早く根際より剪る  
解凍し残る豚ひき一五〇グラム白菜鍋にす冷え込む今日は

富田 真紀恵 富山

父母にだかれて見上げし雪の白思ひださせて今日降る雪は  
幼き日父にだかれて見上げたる雪の白さを思ふ吾かな

吉田 綾子☆ 茨城

成人になりたる孫の晴れ姿しみじみ眺む少し離れて  
長き髪をば結い上げて地味なる振り袖みごと着熟す  
泣き止まぬ赤児の孫を抱きつつ右往左往に行き來し思い出  
幼い頃華奢なる孫は側転を恐れもせずに日々やり遂げし  
物忘れひどく成りたる我が為に孫は白板を設えくれたり  
異常なる熱暑に耐えたる皇帝ダリア遅れながらも花を付けたり  
咲き初むる皇帝ダリアの生氣をば奪い去りたり一夜の強霜  
西方の太き檜の選定に庭師挑みぬ六日と半日

橋 本 文 子 鳥取

本年は昭和百年経つ年と百年展を催されたり  
商店街昭和の賑ひ懐かしみ列に加はり鑑賞したり

江戸時代米子築城に植ゑられし防潮林の潮止めの松

大雪に倒れたる松の切り株は樹齢四百年の歴史を語る  
城山は今も市民に慕はれて元旦は殊に大勢登る

中 村 晴 美 茨城

霜降りて畠に残る夏草の一斉に枯れ抜き易きなり  
間引き菜の大根の葉の柔らかく毎日の様に食卓に出す  
姑の畠の白菜太りゐて新聞紙巻き室内保存す

巨大なるホームセンターへ遠出せり買ひ得なかガソリンの無駄か  
地の底の唸る様なる響きあり青森県に巨大地震が  
スマホ鳴り津波警報発令すテレビつければ派手なテロップ  
小さきツリー歯科医院の片隅に慎ましい中に季節感あり

山 口 嵩 福島

おほかたの紅葉散らした楓の木さびしき影を薄日のなかに  
さにづらふ紅葉は散りて幾重にも庭を覆ひて雪も近しや  
時としてずるる会話も愛嬌か茶を飲む叔母は明日が百歳  
施設にて百歳祝はれ叔母嬉々と日赤当時を記者に語りぬ  
県北欄赤き帽子の叔母がをり微笑む皺は百年きざむ

天野 克彦 大阪

空青く晴れて風なき良き日なり露台テラスに出でて朝日を浴びる  
かかる日は淀の川原を歩くべし久しく歩まぬ足励まして  
帰らぬ日遠きむかしに釣り糸を投げて遊びきこの大川に

淀川のひろき川原に石ひとつ美しければ拾ひてきたる

もの読めばこころに沁みる言葉あり老いて知りたるあらたなことば  
老いの身にいまだ残れる知識欲失せずにあるをよろこびとせん

窓に見る眺めあらはに冬寂びて生駒山なみ夕日に染まる

窓に見るけやき並木のおほかたは裸木となりて天を指しゐる

ものさびし冬木となりたる庭の木々友らはおほく地下へゆきたり

リコーダー

酒 向 陸 江☆ 東京

「ゆる仲」の友と始めたリコーダー半年を経ておさらい会企画  
「ゆる仲」に集いて来るは高齢者自主練習を呼びかけてみる

日中の暇は充分と思いしが人はそれぞれ老いても忙し

何かしら病持ちたる友たち少しずつ音色の揃う童謡いくつ

八十年九十年を酷使した指は中々言うこと聞かず

「よろこびの歌」を吹けばドイツ語で歌い出す友九十五歳(ベートーベン第九)

高 松 美智子☆ 栃木

窓ちいさく高気密をうたう住宅に太陽光を載せ新しき家つぎつぎ

三月に姉となる子が時としてわからず屋になる甘えん坊になる

喜寿卒寿とりたて祝いしことのなき父母を連れて鬼怒川一泊

ジャケットを羽織りてフェルトの中折り帽父の見せいる精いっぱいのお洒落

震える手にゆつくりスプーンを口元に母の好みしチーズのドリア

転ぶなど足元を見て声掛けて娘らしきこと息子らしきこと  
桃色のネリネの蕾は丈たかくうつむきて待つ花開くとき

高 橋 説 子 栃木

赤き葉の橋の上まで舞ひ来たり渡良瀬川の水面濃き日に

四季でなく二季だ夏には五十度だと揶揄する言葉の広がりてゆく  
アンチョビのピザ半分を予め持ち帰り仕様にして呉るる気遣ひ  
ナポリタンを箸で食べる老夫婦の隣にがつり手でピザを食む  
二時間は夢中になれると謳はれる無料ゲームを試して納得  
一番安いメニューは珈琲二五〇〇円目をむき頼む帝国ホテルロビーに  
糖尿に効くよと自作の菊芋を持ち呉るる友に庭の蜜柑採る  
秘密会議はここに限ると独り居の吾が家に集ふ茶飲み軍団

空き巣被害の補償あるといふサッシ屋の電話受く旅先のアイヌコタンに

大 塚 亮 子 東京

藤沢駅に初めて下車しふる里の友を待ちをり三十年ぶりに  
夏祭りの集合写真探し出し友に見せむとアルバムめくる

友の顔思ひ浮かべて留まる事なかりき人の流れ目に追ふ  
その父とそつくりとなるわが友が駅の構内駆け出してくる  
心細さの一瞬に消え笑顔にて大きく手を振る駆け出す友に  
忘れるたるふる里訛りの口ついて出で来る幼馴染に会ひて  
聞くことも話すことも稀となる古里なまりに心安らぐ

## コロナ感染

嶋田正之 埼玉

純白な純透明な宮殿に半透明な人我を手招く  
俗に言ふ三途の川とはこのことかコロナ感染後世の入り口  
果てのなき宮殿広場に数多群れつぶさに見れど知る人居らず  
招かれてゆけば今頃宮殿の人等とともにあの世のなかに  
急速に蔓延したるコロナ菌我が身に及ぶと想像をせず  
感染の癒えて何時もの散歩路ゆけば紅葉<sup>もみ</sup>づる樹々の眩しさ  
久々の歩みに腰や脛脛等の軽き痛みを確かめながら  
大相撲千秋楽を制したる力士に観たるレスリングの技  
秋場所に優勝したる安青錦彼の故郷の戦は止まず

江波戸愛子☆埼玉

ひさびさにあなたと歩く並木道会いたる犬に声かけながら  
並木道あなたと並び歩きゆく歩道に落ち葉を踏むことのなく  
両側に桜の老木並ぶ道見上げて歩む夫も我も  
また犬と暮らしたいなと言う君の声聞き流し並木を歩く  
妹も姉も私も暮らしたことありそれぞれ犬種違えど  
並木道歩くは散歩のコースにて昨日は早足今日はのんびり  
保存会の人びとの手に守られてきたる並木の桜をまわり  
市役所の駐車場に空きのなく夫を降ろして帰りてきたり  
市役所を出でて歩いてきたと言う夫は息を整えながら

橘美千代 新潟

ああ雪の降りてゐるのか暗き朝静まりかへり空氣凍てつく  
庭のオブジェのウサギの親子寄り合ひて頭に今朝の雪をのせをり  
まだ何もわからないよと言はるとも赤児にあげたしクリスマスプレゼント  
息子が一人増えるといふは心配の対象がひとり増えることなり  
ハイウェイ彼方の山は闇に沈み閃光に瞬時あかるむ夜空  
十二月の日差しまばゆき昼下がり長くはもたずタベ暴風雨  
雨風の夕べ吹きすさび夜となれば雪に変りぬもの音の絶ゆ  
雪の夜のじじまを破る消防車のサイレンの音近づきて過ぐ  
孫を見にゆく口実にとどけむかこの近江牛すきやき用肉

八重山にて ブレイクあずさ☆ カナダ

いつこうに次のバス停現れず南の雨をひたすら歩く  
南国の大気は優しとつぶやきぬ氷と雪の育みし君  
どしゃぶりに彷徨う人間取り囮みカラスの群は何を告げるや  
人影も人家もあらぬ雨の道にわかにムムーと黒牛の鳴く  
ほの暗き森の生みたる精靈かゆつくり過ぎる白鷺一羽  
終止符を打つと思いし日々続く旅を決めたる前のわれらは  
反発も皮肉も消えてずぶ濡れにまかせて進むただただわれらは  
深緑のヒルギの森のずっと先黒雲切れて青空覗く  
チヨコレート最後の一片分けあいて歩きだしたり再びわれらは

中村哲也 宮城

斜面型マンションゆゑにだだ広きバルコニー有り落ち葉が溜まる  
鉢植ゑをあまた並べるバルコニーあれど我が家は物干しひとつ  
荒涼としたる我が家のバルコニー山に見立てる石一つ置く  
雨上がり青空放つ陽の光黒き石肌輝き照らす

朝積もる雪解け残る道の辺の草の緑は艶やかさ増す  
一枚は末等当たりて大方は残り寄付なり宝くじとは

付き合ひに予約すジャンボ宝くじ今年も僅か二週間なり

稻田正康 東京

学校建設内装らしき音となり鳥たちはまだ戻つて来ぬか

「前名人」といふ呼び方はをかしいと棋界も主催者も思はないのだらうか  
あすなろと呼ぶる樹の名いたましと思ひたること今も思へり  
歩かない駅構内の店にすと卒業七十年クラスの会

八十年といくさ言ひたる文多く読みたる年の終はらむとする

鈴木よい 東京

枯れて立つスキの群れの静けさに遙かに聞こゆ飛行機の音  
気配して見上ぐる先に鳥一羽わき目も振らず熟柿をつつく

枯れ果ててほどなく落つる葉にもなほ秋の陽じつくり沁み込みてゆく  
烟にて食ぶと言ひつつ柿をむく夫は数切れ吾にも残す  
客席に近付くピエロに子らはしやぎ笑ひ高まりサーカス始まる

サークัสのただ券ありて直ぐ決まる何年ぶりかに会ふ約束も  
葉を落としひしめく枝々顕にし公孫樹は新たなる力をみせる

田端五百子 岩手

丁寧に皺を延ばしてポケットに仕舞ひこみたり負の感情は  
通院は街の空気を嗅ぐ日なり遠廻りして海を見に行く  
かつて街呑み込みし海見晴かす夕陽に焼けて寝そべつてゐる  
日本列島を洗濯するごと搔き曇り天より俄に雨つぶ降りくる  
枝を張るイグネの杉に絡みつく薦の紅葉が夕日に輝く  
婆たちに剥かれし柿は燻蒸終へ軒に吊るされ秋陽浴びをり  
身ひとりに形見の針箱絨毯の下に見つかる母の指ぬき

飯嶋久子☆茨城

落つる陽を背にして歩む我的前影法師長く大きくなびる

影法師の頭のあたりセキレイ一羽着いて来いと云うがに歩む

紅葉狩り行かんと四人誘いあい勝田駅に十時集合

免許証返納ずみの高齢者バス電車バスと乗りつぐ

歴史館の銀杏並木を通り抜け紅葉谷へと坂下り行く

若き日を社宅に住みし四人なり思い出話尽きることなし

庭先に転倒したると友よりの入院手術の知らせありぬ

面会は家族のみと知らされて日々ラインに容態を問う

病院食おいしいし居心地よし笑顔マークのラインが届く

飯 塚 澄 子 東京

卓上の包みを開けて驚きぬクッキーあまた詩吟の教へ子

八畠間に曾孫の友ら集まりぬクッキー持ち行き好きに取らせる

鰻御強歳暮に呉るる教へ子よ時に食する我の楽しみ

よく熟す柿求め来る息子なり少し日を置き楽しく食す

紫木蘭師走に入りて黄葉す落葉少なき庭のこの日々

律詩なる吟詠大会綾瀬にて催されて行く車使はず

吟詠会車で行くこと多けれど綾瀬は近し往復地下鉄

八句から成る吟詠の律詩かな吟ずる者ら口あけ大声

山 本 三 男☆ 群馬

久々にレース場に来て意外にもまだ予想屋がいることを知る  
また一人予想買い来る人を見て予想屋のいる訳を知りたり  
予想屋のまなこ銳し人間の哀しさ心底知りいるような  
恥辱にも似たる心理を思いだす予想を買いし若き日ありて  
予想屋は無言で予想を掲示して台より降りて姿消したり  
変わりたることの一つにゴミ箱に外れの券を捨てゆく人ら  
うつむきて出走表を見詰め居るこの老人達の姿の愛し  
ここで食うおでんは旨し場内のアナウンスの声流れる中で  
居心地の良き観客席に座りおり善人よそおう必要もなく

江 藤 ひさ子 大分

「園芸百科」は吾の良き友をりをりにページを捲るそれの楽しく  
強風のけふの終日絶え間無く庭の花・樹を大きく揺らす  
しつかりと手摺りを持ちて階段を上り下りする吾の最近  
洗濯物を干さむと階段のぼる都度「大丈夫」と声掛けくるる夫  
「大丈夫よ」と即答「一・二・三」と声に出しつつ階段上る  
体力も智力も劣化その速度悔やむも詮なし九十四歳  
体力に智力にプラス筆力の劣化を思ふ文字書く度に

戸部田 とくえ 福岡

この秋も京都の旅に誘はれて子は喜べりわれ歩く姿に  
祇王寺の帰りつかの間ふり出す雨めぐらす思ひの零となりて  
祇王寺の苔庭に散りつむ紅葉をせまる寂しさ両手につつむ  
この春は大学卒業の子とけふは校庭の楠しばらく仰げり  
天風の持論の菜食その主義を見習ふべきと耕す畑  
年々にはびこる芒を刈りつつも意外な堅固に手間どりてをり  
ほとどぎす咲きゐる寺に命日の母の供養を託して帰りきぬ

稻 津 孝 子 福岡

子規庵の種を貰ひし鶴頭もいつか無くなる我が庭のうへ  
断わらむと思ふ夕刊に友の子の青木繁のコメントの載る  
ウラジオストクからシベリア鉄道にてモスクワに行きドイツ留学しにき夫は  
反対に針うごく時計みつけにし夫と見に行き電車に乗りて

紫蘇の実を摘みゐる横を頑張れと言ひゐる如し蜆蝶ゆく  
畑に生ふるグリーンアスパラいつまでも暑く繁りて一つづつ立つ  
東北震災に孫と共に來し梅の苗庭に咲きつぐ白加賀といふ  
どこまでもどこまでも遠く行きたしと思ふ十月秋明菊咲く  
若きころ生命線の事おもひけり湯舟につくづく掌みつつ

姉 川 素枝子 福岡

長崎県川棚海軍工廠に動員されゐき学生われの  
粉塵まふ铸造所にて張落としたちまち肋膜炎症となりたり  
空襲に眠れぬ夜よに出で来たり南京蟲は若き血すひき  
焼夷弾に大村燃ゆる火あかあかと海に反へりて蚊帳に映りき  
唐突に閃光激震に悲鳴あげ皆押し入れの中に逃がれき  
新型爆弾あびし学生數十人トラック運び土煙あげて  
戦争を知る人の減り肅肅と言葉をかへて近づく何か  
試合終了のサイレン鳴れば身構へて逃げむとぞする老の記憶は  
若き命を死なねばならぬ戦争に行かせる世には「ゆめ」してならぬ

井 上 菅 子 山形

少年の飼ふ爬虫類逃げ出さぬうちに通らむ夜明け前  
強風に飛ばされてきてわが庭に落着くビニール袋の前世  
緑の葉何も無くなる冬の町雑草混じる花の鉢買ふ  
ベトナム産の骨抜きさばを焼いてゐるグリルに煙充滿させて

もう何も容れるもの無き愛用のカバンの数々日を恋しがる  
浮世のことはどうともなれよ不本意な者へも渡す黄色のバトン  
苦々しき過去も共々打ち碎き重機は励む解体作業  
日当たりを歩けば己の影つくる葉の落ち尽くす樹陰を歩む  
痩せたる子熊撃たるニュース朝より心慰まぬもの見てしまふ

井 上 横 子 新潟

連なりて入り日に向かふ白鳥は寂しき声を天に響かす  
末枯れゆく花花の中風に靡きサルビアの朱際立ちて咲く  
竹箒持ち来て奉仕と呴きて頼まぬ老いは墓所へと向かふ  
漏電点検はわが部屋の天袋からと聞き雜多なる物急ぎ搔き出す  
石段の手摺りごと欠き走りゆく車を防犯カメラは映したり  
防犯カメラ設置のテレビはわが部屋にて警官の出入りに事涉らず  
大事にせぬとふ意向を夫伝へ年末に工事を急ぎて頼む  
前を行く除雪車みづから捲き上げる雪のけぶりに音のみ聞こゆ  
雪の時季池の水は澄みわたり泳がぬ錦鯉は映像のごとし

午後一時～四時半まで。

冬雷歌会情報

川越二月歌会のお知らせ

二月二十八日（最後の土曜日）

JR「川越」東上線「川越」西口より徒歩

五百メートルへウエスタ 川越／会議室5

大山敏夫の九名。（敬称略）

人数が少ないので、時間たっぷりかけての係へご一報願います。

批評会を毎月行っています。参加希望者は左

の年十二月の出席者は以下の皆様。

嶋田正之、倉浪ゆみ、首藤文江、高橋耀子、

立石節子、野崎礼子、安川敏子、山崎猛。

連絡先

安川敏子（090-4608-7265）

野崎礼子（090-9971-8149）

桜井美保子

とは本当に有難いこと。歌には夫への感謝の心が籠っている。

胃潰瘍の治療始めて二三日薬の効きて

食事作れる

青木初子

胃の調子が悪いと家事をするだけでも

大変である。病気が判明し、その治療を

始めて体調が整ってきた。安堵の思いと

回復への道が見えた喜びが慎ましく詠ま

れている。

青大将玄闇スタイルに横たはる秋の気配

に遠出したるか

中村晴美

驚いてどうしたらいいか分からぬが、

筆者などは、もし青大将に出会つたら

有泉泰子

作者は流石に落ち着いておられる。よう

やく秋になり遠出してきたのかと勞りの

眼差し。ユーモアを含んで軽妙な表現が

面白く巧みな一首だ。

足跡を探らん廊下にうづくまる鑑識の

人ドラマさながら

高橋説子

外出中に空き巣に入られて窓ガラスを

破られた。他にも被害はあつたのだろう

が、留守中のことで怪我もなく無事だつ

たのは幸い。現場検証での鑑識の人の仕

歩き方これで行けるか参集の東陽町は

電車ひと筋

稻田正康

にはお元気になられて退院し、東陽町で

開催された大会に出席された。ご自身の

歩き方を確認し電車に乗られた。大会出

席への強い意志と熱意に頭が下がる。

御時世に店を置むと鮮魚店鰯の煮付を

井上楨子

大型店進出で個人の店は経営が厳しい

世の中だ。馴染みの鮮魚店が店仕舞いす

る。閉店の挨拶と共に煮魚を近隣のお客

に配る店主。店先で言葉を交わした日々

も過去のこと。寂しさの滲んだ一首。

## 十二月集／残響集評

鈴木やよい

塩茹でのまろき子芋と神酒すき月見の宴はひそと慎まし

小林貞子

中秋の月に里芋、お神酒、すすきが供えられている。澄んだ月を静かに見上げてゐるのだろう。「ひそと慎まし」に作者の心情がのぞく。

秋陽浴ぶるまんまる久留米鶏頭は妣の

作りし御殿毬に似る

佐藤幸子

丸い形の久留米鶏頭を見て、亡きお母様の作った御殿毬を思い起こしている。

秋の陽に咲く鶏頭と、御殿毬の文様。色鮮やかなイメージが浮かぶ。

母逝きし年令となりても何一つ及ばぬ吾に少し淋しき

山本述子

立派なお母様であつたようだ。それに比べて私は：と思っている。作者にとつては、いまだに大きな存在なのだろう。

夏草に埋もれたまま公園にジャングルジムやブランコのあり

川上美智子☆

最近はブランコとかジャングルジムが

事ぶりをドラマしながらと見ているところが作者らしい。

なれたゆゑ驚かないがロボットが料理

お馴染みの場面。ロボットが料理を客の

席まで運んでくる。最初は驚くが、慣れてくれるとロボットの動きには違和感がない。「しづしづしづと」に納得。

歩き方これで行けるか参集の東陽町は

電車ひと筋

稻田正康

最近のファミリーレストランなどでは

お馴染みの場面。ロボットが料理を客の

席まで運んでくる。最初は驚くが、慣れ

くるとロボットの動きには違和感がない。「しづしづしづと」に納得。

歩き方これで行けるか参集の東陽町は

電車ひと筋

稻田正康

事ぶりをドラマしながらと見ているところが作者らしい。

なれたゆゑ驚かないがロボットが料理

お馴染みの場面。ロボットが料理を客の

席まで運んでくる。最初は驚くが、慣れ

くるとロボットの動きには違和感がない。「しづしづしづと」に納得。

# 大友柳太朗と美空ひばり（最終回）

## —その短歌と情—

大山敏夫

美空ひばりが「歌う女王」ばかりでなく、女優としても大飛躍へのきっかけとなりそうな時があったようである。東映と結んでいた専属契約の切れる一九六三年、今村昌平監督から意欲作『にっぽん昆虫記』の主演のオファーを受けたといふ。この映画はその後左幸子の主演によつて公開され、大評判となり内外の映画賞をいくつも獲得した。

竹中労著『完本 美空ひばり』には、

今村は『にっぽん昆虫記』を撮るとき、主演女優の候補として最初に美空ひばりをあげた。交渉を受けたひばりはシナリオを読んで、「確かにしている。なんで私がコンチューなのよ。ヌードにならなくちゃいけないのさ」とオカムラであった。正直いって、私もひばりからその話を聞いて、首をかしげた。脚本に書かれたためのイメージとひばりとは、まるで異質に思えたからである。しかし、できあがつた作品を見て、私は今村の炯眼を納得したのだつた。

とある。「新宿の映画館の超満員の立ち見席で、『にっぽん昆虫記』を観て、不覚にも涙を流した」とも言つてゐる。竹中と言えば、生前の美空ひばりが最も信頼していたジャーナリストの一人だと伝わつてゐる。ゆえにその著書名に「完本」の冠が付くのであろう。自信のあらわれだ。竹中は、もつとも日本のイメージをもつ女優として、今村はひばりを考えたにちがいない。

と記してゐる。

今村昌平監督は、この後も、「赤い殺意」（一九六四年）、「神々の深き欲望」（一九六八年）、「復讐するは我にあり」（一九七九年）等の話題作を続々作つて行く。

『にっぽん昆虫記』のためは、言わば汚れ役である。美空ひばりは、映画の中で悪役や汚れ役を演じたことがない。仮にひばりが『にっぽん昆虫記』にそのまま出演を決めていたら、どんな映画になつていたか。そしてその後の女優としての在り方に、どのような変化があつたろうかと思う。

映画は左幸子の好演によつて大成功をおさめたことは周知

の事実で、竹中労は、映画の中で左幸子のためが、ときどきの心境の表白を百人一首めいた詠唱で行う、として、

国のためにと働く

今は一人で日記つけるう

なる東北訛りの短歌？ を声に出しつつ書きつけるシーンを紹介してゐる。思わずわたしは、これを美空ひばりが演じて

いる場面を想像してしまい、胸が熱くなつた。なぜか、ひばり自身の生き様もまた「…のため家のためにと働くけど…」と思わせ、「今は一人で自伝書いてる…」みたいなのだ。

美空ひばりの生涯の中でついに演じることの無かつたのが「出雲阿国」である。歌舞伎の始祖と云われる阿国をひばり側は演じたかったが、原作者の有吉佐和子から許可が降りなかつたと言う。ひばりと深い親交のあつた映画監督沢島忠の著『美空ひばり 思い出草紙』（二〇〇一年ワイス出版刊）にはそのことがちよつと書かれている。ちよつとだけれども実はかなり憤慨してゐる書き方だ。

有吉氏は「此の作品は私のライフワークよ、ひばりにはやらせない。監督も木下か黒澤でないと許可しない」と言つたとプロデューサーの言。（略）ひばりちゃん母娘には「ひばりにはやらせない」と言えなくて「木下か黒澤でないと許可しない」とだけ報告された。（略）沢島忠のプライドは全くふみにじられた。腹が立つて、こんな原作者のものをやるものか!! 以後有吉氏の作品は一切読んでいない。

とある。そこで考えたのが出雲の勧進巫女から出た娘が京へ来て、芸一筋に生き抜く半生を描いた『女の花道』（一九七一年、東宝）だったのだとあつた。

福島泰樹氏歌集『蒼天 美空ひばり』には、△美空ひばり

は記紀万葉以来、この国の生んだ最大の歌姫です。√と讚えられる言葉がある。昭和を代表する歌姫だというならその通りと賛成するが、記紀万葉以来、となるとかなり疑問であるし、そう言いきる根拠も見つからない。では、この出雲阿国にも負けていないのか？ とふと思う。もつとも出雲阿国は「歌姫」だけで語り尽くせないと言えば比較にもならないが。

その死後に直筆自伝として『川の流れのように』が刊行されたが、本人の記した「あとがき」には、

これをネタにいろいろと私にインタビューされる方も多いらつしやることでしよう。まだ書き残している分も幾多あると思われますし、私はこれで世を去るわけではございませんので、後のことは何なりとお聞き下されば、お答えしようと考えております。

とあります。これが遺稿になるとの認識が全くないのだった。またこの書には、メモリアル・ノートとして、書き溜めてきた様々な散文、詩、歌がまとめられている。更に「闘病記」として、最後の入院中に書き綴つた重たい内容の記録も収録されている。それらの、原作の五行六行に記すものの中から、短歌の形式をとつてゐるところをわたしが任意に切り取つて二行に書き換えて、短歌らしく見せたものが左である。

天国の母に叫ぶか風に乗せ誰に言えよう

花よりも美しき心失わずこの世の沼を歩  
みづけん

さわがしき鳴く蝉に似た雨音に我れ寝つ  
かれず筆をとるなり

だまされてまだまされて人の世に我れ  
をもだまし生きるばかりか：

三番目が最も短歌的かと思う。それにしても「この世の沼を歩みづけ」とか、「だまされてまだまされて」とか、マイナス的な思いが深い。観念的な詞句が並びオーバーアクションなのは、歌手としての復活を目指し、辛い鬱病生活に打ち勝つアドバルーンの意味もあるのでやむをえない。他にもコンサートで使うナレーションを自分で考えたものの中に、しばしばこの短歌形のリズムを活用している。また、毎年の年のはじめ、誕生日等にはメッセージを出していたが、そこでも短歌形式に乗せたものがある。

新しき初めありとてゆるみなく青く芽を

ふけ雑草のように

潮騒の静けさ満ちて雨ぞ降る我、城ヶ島

に一人たたずむ

実るほどこうべをさげし稻穂とて我この

道に悔いは残さじ

母の愛母の涙の尊さが我が人生の忍耐と

なり

母と子が選んだきびしいこの道を今改め  
て胸につきさす

齊藤慎爾が著書『ひばり伝 蒼穹流謡』の中で、「美空ひばりは折に触れて短歌を披露していた」と言っていたのは、こうした数々の短歌のかたちを取った詩文の部分のことを指しているのかもしれない。美空ひばりは古風な女性である。「我」「我が」と文語的に発想することが多いので、その調べが七五調になると短歌に酷似することになるのかと思う。

これらは短歌的だが、本人に短歌という認識はない。あらためて思うのは、美空ひばり自身がこれは短歌だとして発表した作品に比較すると、ここで切り取った様々な詩の中の短歌的な詠嘆は、短歌ではないので、かなり主觀の勝ったナマの心情（スローガン的、自身への鼓舞）露出が強い。

この微妙な違い、美空ひばりには、短歌というものがどうす

うす理解できており、敢えて短歌を作るとなると、自ずから襟を正すようなところがあつたのだと思わせる。

福島泰樹氏歌集『蒼天 美空ひばり』での追悼歌を二つあげて、終わりとしたい。

一九八九年六月の雨天を翔けてゆきたる一羽

港町十三番地の上空を蒼天ゆえに轟りやまぬ

福島 泰樹

〈完〉

## 美空ひばりの文学的才能

高橋輝次

本誌主宰の大山敏夫氏に私が古本で見つけた大友柳太朗の珍しい歌集、『渚』を提供して、氏のユニークな連載執筆に多少はお役に立てたようで、ご縁ができた。先日、お電話で原稿の依頼があり、近年めったにないことなので喜んでお受けしたのだが、その主旨が氏が連載で紹介した美空ひばりの短歌二首への感想如何？ というものの、難儀なことになつたと戸惑っている。氏の適格な解釈以外に私がつけ加えることなど何もないからだ。

というのは、私は詩集もそつだが、俳句、短歌についても全くの素人で、お恥ずかしいことに名高い詩歌集さえ、殆ど読んではない。ましてや一度も短歌をつくったことがない人間なのだ。ただ、古本漁りが趣味の元編集者なので、人並みの知的好奇心は持ち合わせていて、例えば河野裕子や篠弘の歌集などは古本で少しばかり見つけていたことは記憶にある。前者はがんとの長いつきあいや家族への愛情あふれるまなざしに感銘したし、後者は小学館の幹部編集者として百

科事典や美術全集を担当した人で、社内の会議の様子や神保町の古本屋が度々詠まれているので、私には魅力的である。また、私は出版史にずっと関心があるので、昭和戦前の文芸出版社、砂子屋書房主の山崎剛平が歌人で、歌集を出していること、戦前のモダニズム出版社、金星堂主人、福岡益雄も二冊の歌集を出したことを知り、新刊本で紹介したりした。しかし、美空ひばりについてはその数多くの曲や生涯についてもごくわずかしか知らず、まして彼女が短歌をつくっていたことは大山氏のエッセイで初めて知ったのである。

ひばりと言えば、私の少年時代、大好きだった嵐寛寿郎の映画「鞍馬天狗」で杉作少年として共演した天才少女で、その頃流れていた「悲しき口笛」とともに後々まで印象に残っている。さらに晩年に歌つた「愛燐燐」や「川の流れのように」を聴いて、これこそ彼女が言う「人生の歌」だと深く感銘して以来、彼女を見直すようになった位であろうか。彼女が東映専属の映画スターとして大活躍したことや江利チエミ、雪村いづみとて『三人娘』として歌い踊ったことなどは記憶にあまり残っていない。

大山氏は、小林旭との結婚披露宴で二人が相聞歌を交したことを紹介している。式には大勢の人が招かれたが、その中で大友柳太朗がもしいたとしたら、二人の短歌をどう受け止めたか、と想像をたくましくしている。たしかに、大友も東映時代、丹下左膳や右門捕物帖、怪傑黒頭巾のシリーズなど

で大活躍しているから、ひばりとも共演する機会が何度もあつたろう。そこで私は手持ちの大冊、『大友柳太郎快伝』を取り出して調べてみたが、一向にひばりの名は見つけられない。大友は女優とは、千原しのぶ、高千穂ひづる、松島トモ子などとよく共演している。あきらめかけたとき、ふと二二三頁の映画ポスター写真「決定版丹下左膳」（昭和三十三年）をよく見ると、ひばりもお姫様役（？）として出演者名の中に連なっていたのである！ 他にも共演作があつたかも知れないが、これ以外は不明であった。考えてみると、大友は交友のあつた多くの人が指摘しているように、眞面目すぎて神経質なところがある人だから、たとえ共演したとしても、おそらくひばりとうちとけて話す間柄にはならなかつただろう。私は大山氏の連載のタイトルから、二人に何らかの接点があつたのではと期待していたが、どうもその可能性は薄そうである。

実は、この原稿を書くために、大山氏が参照しているひばりの評伝類を一冊も読んでない私は、せめてケータイで彼女のウイキペディアを読んで基礎的知識だけでも得ようと考えた。見てみると、その生涯の紹介は相当詳しい長文であった。そこには芸能歴や歌手歴とともに、母や弟との家族関係や明暗両方の仕事上の支援者との関係もありのまま記されており、さらに晩年、足の悪性の激痛、肝硬変や肺炎を患いながら、命をけずつて全国ツアーのコンサートを続けた様子もうである。

がつていたのだろう。数多くの曲の歌詞を読み込んだ彼女が、五七五七七の定型リズムをもつ短歌の役割のひとつである、普遍的なメツセージ性にも気づき、短歌を詠みだしたのも自然なことだと思う。日記も付けていたというから、折々の出来事のメモと一緒にその心境を短歌で末尾に付けていた可能性もある（あくまで憶測にすぎないが…）。その辺、どなたかが発掘して発表して下さることを期待しよう。

ともあれ、今回、私は大山氏の原稿依頼のおかげで、ひばりの新たな短歌を二首紹介でき、感謝しています。

〔追記〕以上の原稿を書き終えた三日後に、注文しておいた『ひばり自伝』が札幌市の古本屋から届いた。本書は一九七一年に草思社から出でおり、ひばりが三十四歳頃に書かれた半自叙伝である（彼女は一九八九年、五十二歳で亡くなっている）。早速急いで拾い読みして大へん面白かつたが、すでに原稿枚数が超過しているので、その内容紹介は省略せざるをえない。本書には期待していた短歌は出てこなかつた。しかし私には一つの発見があつた。最後の方で、ひばりは詩を書いていることを告白し、数篇の詩を披露しているのだ。さらに、ウイキによれば、ひばりが作詞した曲が二二曲もあるという。やはり彼女は詩歌という文学的才能も豊かな人だつたのだ、と改めて納得したのである。

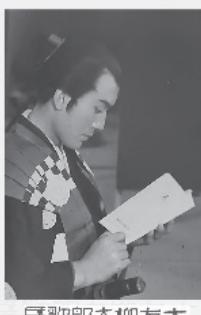
具体的に詳述されていた。私は彼女の歌への限りない執念や鬪病の驚くべき精神力に感嘆し、改めて敬愛の念を抱いたのである。それだけでなく、この長文中に思いがけなく、彼女的新たな短歌（もしくは短歌めいたメツセージ）二首が紹介されているのを見つけ、うれしくなった。

その一つは九州の病院への再入院の際にマスコミに向けて発したメツセージとして、「麦畑ひばりが一羽飛び立ちてその鳥撃つな村人よ！」を発表している。これは直接的表現を避け、自身から距離を置いて鳥に自分を託してその心境を語らせるという、比喩表現に長けたものだろう。そういうえば、小林旭への相聞歌「我が胸に人の知らざる泉あり つぶてを投げて乱したる君」でも、『泉』という巧みな比喩表現を用いている。もう一つは、年号が「昭和」から「平成」に変わった一九八九年一月八日に「平成の我新海へ流れつき命の歌よ穏やかに…」と詠み、その三日後、「川の流れのよう」の新曲を彼女のたつての希望でシングル盤として発売したと言う。川から海へようやく到達し、広大な大洋へ新たにゆつたりと漕ぎ出そうという心境を詠んだものだろうか。彼女がもし生き延びておれば、この「人生の歌」の路線の歌をさらに発表できたのにと想うと、惜しまれてならない。

彼女が短歌をつくるようになつたきっかけや時期は全く分らないが、大山氏は「幼い頃に百人一首に馴染み、誦んじていたそう」と書いていたので、その素地は早くから出来上

## 映画では豪放磊落 短歌では繊細多感!!

渚



大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 大山敏夫

本文136頁 表紙カバーに帯を巻く。

## 冬雷短歌会文庫新刊!!

永光徳子歌集『陽だまりの庭』

近刊。

入会以後約十年間の作品から三七二首自選。一頁三首組みでゆつたりと作った新歌集。本文178頁。

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞 大山敏夫著 近刊。

昭和十四年刊行の歌集を忠実に再現、そのすべてに鑑賞を入れた書き下ろし。他に「『渚』とは」、「大友柳太郎の背負つたもの」の論考二つ収録。

本文136頁 表紙カバーに帯を巻く。

# 作品一

桜井 美保子 神奈川

二、三日寝れば風邪など治りしが寝たり起きたりの十一月なり  
なんとなく続けてゐたるサプリメント風邪を機会に解約したり  
眠れない夜に眠れる音楽といふを聴きをり面白からず  
パソコンの前に坐るが胃にもよくネット歌会に少し書きこむ  
右を下に寝るのがよいか左を下か髪ざんばらで寝返りを打つ  
わが夫の生日祝ふと次女が来て目新しき料理作りて呉れぬ  
蓮根を入れたるつくねのステップ飲む次女の手料理久方ぶりの  
見舞にと長女くれたる『国語便覧』どこから見ようか気力湧き来る

正田 フミエ☆ 栃木

夏を越え秋に実れるトマトたち鈴なりなれど赤くはならず  
中玉の青いトマトが目立ちおり赤くなるのをわくわくと待つ  
わんさかと青いトマトがなつており十一月の風に吹かれて  
トマトには積算温度が千度要る青いトマトに晚秋の陽射し  
霜が降る予報を見れば青けれどトマトの収穫家族でなしぬ  
ビニールの袋にリンゴと青いトマト追熟待ちて冷蔵庫上に

うす切りの青いトマトに塩ぶりでレタスと合わせサラダ大盛  
一粒の種から育苗したるレタス大きく育ちその葉を食みぬ

斎藤 トミ子☆ 栃木

幹太くどんどんと立ちいる大銀杏五百五十年の風格を見す  
輝きて銀杏散るなり鎧阿寺の太き木の下黄に染まりいる  
年末は十一月と考えてまずは天井の煤払いする  
電気の傘カーテン洗う小春日は暑さの去りて身体が動く  
保存にと埋めた牛蒡に花咲きてこぼれ種にて葉が茂りいる  
その時はその時で良しと山歩く熊情報の貼り紙見つつ  
吾の元気と残りの時間の限界を病みてしみじみ思うこの頃  
コロッとは元気でなければ避けないと友との会話最後に何時も

田中祐子☆埼玉

時季折りのきとの香りを送り呉るる義姉の存在つくづく温む  
薄らと霜のかかりていじらしき百日草の返り咲く庭  
頻繁にメールを呉れる近隣の女性何やら悩み在るらし  
担当の民生委員を解かれたと半泣き顔の六十二歳  
高齢の親の介護と農時など無理なる日々を根気良く諭す  
二日後に明るきメールの届きたりわが考えに迷いはなくて  
白髪の素敵な婦人に出会いたり姉の重なる暖かき広間  
ひとり居は惚けると子等に脅かされ週に三日のデイケアに通う

浜田 はるみ☆ 埼玉

埼玉

玄関の落葉毎日掃除する早く裸木になつて欲しいと  
野菜食む度に味を思い出す昔の野菜と全然違う

掃除ロボ近くに来ても知らぬ顔そんな時代に今ではなりぬ  
七十五急に体力落ちてきて計画よりも十年早い

ハラスメントばかりで何も話せない音も言葉もため息さえも  
ウクライナ戦時に汚職あると言う考え方られない恥知らずな事  
ロシアとウクライナの和平案あんに降伏迫つておりぬ

岩渕綾子 岩手

十重二十重あまたの所行なし終へて幼にかへり亡き友恋し  
3・11後十四年八ヶ月の黄昏に津波注意報出で心は彼の地  
ハッピーバースデイ職員さんに感謝しぬ今日の一<sup>ひと</sup>日は心が和む  
朝なさな熊のニュースに怯える文明の世にいかになるらむ  
津波に呑まれむとするわが家の直前の写真がテレビに映る  
航空写真よくぞ見付けし小さき家スマホに映し子が送りくる  
今もなほ目に残りゐるわが家の思ひ出あまた姿思ほゆ

倉浪ゆみ 埼玉

クラス会はじける笑顔いと楽したちまち戻る高校生に  
来る年は長男の干支うま年ぞ肺ガン術後十年たちて  
外つ國の人ら和装しうれしげに横並びで行く蔵造りの街

地ざう様もみぢの落ち葉にかこまれて供花は黄の菊供物は柿の実  
友の家薦の紅葉はかがよひて「取らないで下さい」の貼り紙のあり  
冬木立見上げてみれば寒ざむと高く広ぐる霜月の空  
木の根方黄の色灯しつはの花凛と咲きゐる晚秋の庭  
団栗のカタンカタンと落つる音今年振り返りつつ我は聞きをり

林 美智子☆ 東京

夫目覚め今日は会議があると言うやや落ち着きて夢かと安堵す  
やむをえず三日続きで外出す風邪の前兆喉痛むなり  
冬空に枇杷の花が盛りなり白き粒々初夏には朱き実  
フランスより熟年夫妻来宅すユーモア溢れ日本食好き  
来客の希望に長男同行す大出山より紅富士見たりと  
沢山の感謝の言葉と笑顔残し日本を旅して夫妻は帰国

松中賀代☆ 高知

鳩の群すずめの群に入り交り電線にゆれるカラスも一羽  
窓外は台風なみの風が吹く部屋の中より風に恐れる  
アザレアは留守の間を守られて枯れずに長く花を保ちぬ  
日中は杖の歩行に変わりました足の運びに不安感じる

六角堂の岩洗いやく波しぶき天心と同じ太平洋を見る

本郷歌子☆ 栃木

雲から風に自在に姿を変えながら何を追うのか鰯の群れは  
鉛なりの柿は残らず木守りとなりてゆくのか取る人おらず  
「お義母さん自制力が凄いわ」と嫁に褒めらる激安スーパー

「カフェってさ喫茶店のことなんだよ」百歳近き叔母との会話  
モタモタとスマホは間に合わぬシャツターチャンス心の内にプリントをして  
朝日森の撫で牛の膝は光りたり我も撫でゆく頭、腰、肩

村 上 美 江 岩手

一步づつ膝を気遣ひ歩きゆく犬との散歩もう追ひ越さる  
バス停に息子の送迎忙しくクマの話題の無き日懐かし  
重き実の赤く色付き艶増せばリングますますわれ丈夫にす  
折角の虹が懸かれど厨の窓日差し弱まりぼんやりと消ゆ  
裸木は寒さうにあり柿の実はクマ対策にて収穫されたり  
留守電におせち注文案案内の音声幾件も重なりてをり  
カニ料理イクラも入り鮑など殿様のやうおせちの広告  
大分の火事に被災したる人インタビュー受け声消えてゆく

伊 澤 直 子☆ 東京

蒲郡クラシックホテルのダイニング海に向いて一等席なり  
半島の黒き影に沈みたる赤き夕日を追いて眺むる

国宝源氏物語絵巻現存の全巻展示す徳川美術館  
絵巻見て九百年の時を経る王朝文化を推し測りたり

絵巻のひとつひとつにじっくりと見入ってしまう時を忘れて  
九百年の時空を越えて保存する努力のありて今の楽しみ  
いつも行く武蔵野公園のもみじ道今年は少し出遅れたる色  
色づきの美しき木をボックンはスマホで写し得意げに見せる

乾 義 江☆ 茨城

この腕に何回注射を刺しけむとインフルエンザの予防接種受ぐ  
手慰みに幼く遊びし猫じやらし枯れてよごよご秋風に揺る  
窓遠く舗装工事の音聞こゆ不自由強いらるこの年末に  
自転車に苦なく走れど我が歩行動画に見ればショックを受ける  
両家の顔合わせの写真届きたり人柄の見えて一安心す  
鉢植えに如雨露向ければ何処からかあきあかね一つ目前に舞う  
大きなる渋柿求め二十個程を何年振りかに剥きて吊しぬ

防犯カメラ 永 光 德 子☆ 東京

我が家にも防犯カメラ設置する独り居案ずる娘の提案

遠隔のスマホで吾の動行を娘は見てる背筋のばそう

元氣なる姿見せたく手を振ればオットットト転げてしまいぬ

久々に旧友四人のランチ会ちよつとお洒落していそいそ出向く

帰宅時の防犯カメラの映像はヨタヨタ疲れた老婆が一人

娘からお疲れさまとメールあり行きと帰りの落差笑いて  
昼も夜も見守りくれたる此のカメラありがとうねとそつと見上げる

短歌書く原稿用紙に冬の陽は南天啄む鳥影映す

祝ひ

松本英夫 東京

八十の祝ひを妻は贈られぬ横浜一泊子らの案内

妻の熱三十七度を超えてをり明日は横浜息子の待たむ  
くれなゐの馬車を引きゆく白き馬開港いまに馬車道まつり

ランチにはサラダとピザが大皿に秋風さやかな店 Piacere (ピアチューレ) 初めまして)

横浜に飛驒牛食めばよみがへる二人で歩みし飛驒の街並み

ペリー乗り煙たなびく黒船は光さし来るステンドグラスに (横浜市開港記念館)

漆黒の空と海とに挟まれてみなとみらいは光みち満つ

運転の嫁と妻とは二年ぶりつもる話は尽きることなし

高速を降り畠中の道ゆけばかもめ群れとぶ三崎の港

大塚照美 兵庫

立ち姿の品格あふる愛子さまの見事な着こなしラオスのファッショソ

剪定の終はれる庭の夕月夜盛りて美し金木せいは

パン食にて朝のコーヒー欠かせぬに飲物に迷ふ気力なき今朝

小春日のつづく庭にて忙しなきあまたの蟻を踏むこと勿れ

霜月といへど季節は足踏みにて縁ゆたけし並木の公孫樹

辛うじて二足歩行も危ぶめど杖ありてこそ人並みの今

座長なる仲代達矢氏の見納めは劇場にての「リチャード三世」

追悼の番組仲代達矢氏の今夜の映画を待つ「果し合ひ」

気がつけばフロント・ガラスいち面に鰯雲みゆこれこそ秋ぞ

三好規子 福岡

日本より米が安いとトロントの孫より北海道ななつぼしの写真  
アイルランドやチリやイスラム圏の寮友とピザを作り笑む孫の写メール

東京より福岡に出張の弁護士の甥が施設に訪ねくれたり

デパートにて種ぐさの菓子を少しづつ選りて土産に持ち呉るる甥

東京にて忙しき甥が二時間ほど施設の我の相手をして呉る

エレベーター点検のため使へずに四階へ登る買ひ物さげて

階段を登りし所為か腰や臀部いたみ病院へ行く車椅子にて

ぎつくり腰の診断うけてコルセットと薬に様子みる骨折でなく嬉し

須藤紀子 埼玉

知らざりしこと身に受けて知るも良し例えは帶状疱疹などと言ふもの  
今日つひに我ウイルスに勝ちたるらし久方ぶりの珈琲旨し

残り飯まけば雀の数多来て啄み始む霜置く庭に

ひとつ花残るミニ薔薇吹き募る師走の風に耐へて揺れをり

尉鶴いつもの一羽いまだ来ず年の瀬迫り末枯れゆく庭

裏窓を開くれば入り来る枯草の初冬の雨に濡れたる匂ひ

佐藤靖子 東京

側溝に光がすべり落ちたのは蜥蜴だたらう八月の謎  
ただジャムにするのみなりし杏の実その効用や逸話知らずに

素材は竹さういふティシューのさらり感よのなか少しよくなるのかも  
今際といふ時にはきつと茄子食べむとりわけ皮のその紫を

微震さへおそろし病的にこの臆病は治るよ死なば

家のあと多種まじるとき耳奥に「蛍の光」きつと流れ来

借りきたる大活字本〇〇ポかそのゴシックに胸わるくなる

ある人のあの世ゆきたることを知り意識の隅の暗がり消えつ

この土手の泡立草のみな低し背高泡立草この頃見えず

薄紅と濃紅と白の庭の菊泡立草の壺に納まる

ご自由にお持ちくださいの紙を貼る庭の甘柿入れたる箱に  
数多なる庭の甘柿よろこんで貰つてくださる近所の方々  
玄関のチャイムの鳴れば名を知らぬ方の挨拶柿のお礼に  
庭の柿貰つてくださる幸ひとしみじみ思ふ師走のはじめ  
背の高き友の届かぬ庭の柿そのまま残す鳥たちよ来よ  
枝に付く柿食べ尽くす日となりつ鳥ひよどり雀らの来て

鈴木計子

東京

ブランドとブレンド米の味値段一文字だけの違ひにあらず  
この年の新米ことさら有り難しふる里魚沼産なればなほ  
手をつなぐ座席のふたり空く手にて画面操作す会話はせずに  
稻刈りを待つ黄金田のまだ多し磐越西線十月の窓

会津鉄道沿線駅の掲げゐる「八重のふるさと」の薄れるる文字  
盆踊りに必ず掛かりし「会津磐梯山」けふその山を窓に見て過ぐ  
沿線の里に数多色づく実会津みしらず柿かなあれば  
柿みのる里の後に迫る山くまが出ることありやなしや

石渡静夫

茨城

クワーンと高音響く空見れば模型飛行機らしき二機飛ぶ

調査などの仕事であれば我慢する奇異な物体さうでないらし

住宅地に近いところで飛ばしてゐ我家にリモートワークの子も居り

住民は音の苦情を言はぬのか吾意を決して一一〇番する

事故ですか事件ですかと忙しげに受けた職員吾を急かせる

OBと聞いて受理した職員は安堵したるか声の和らぐ

蔵の街を流れる川に魚棲みて立ち止まるたび口開け近づく（栃木市）

来年も笑顔でお会ひしませうと民踊の師は稽古納めに

西村邦子

兵庫

茶席の床の拝見掛軸の淡々斎「無事是貴人」

茶席のお茶一服のお点前にわが師の姿重ねつつ偲ぶ

父ははの齢に近づきゆきたるを弟と話せる祥月命日

古稀過ぎたる三歳違ひの弟は父に似て来つその横顔が

弟は葉刈りをしたと障子開く縁側から広がる苔むす前裁

バス道の曲がり角まで幾たびか振り向きたれば弟手を上ぐ

齋鹿ミヤコ 神奈川

高台に住みたる息子は日の出見るナイスショットの犬の後姿  
犬を飼ふ子供ら三人それぞれの子の教育に似る犬の育て方

植 松 千恵子☆ 静岡

土掘れば巨大な芋虫育ちたりサツマイモつつき栄養たっぷり  
大切な地鶏の雛を嬉々として頬張る熊の対策急務

人襲い凶暴化する熊処分適度な数の共存願う

正倉院千三百年の時を経た瑠璃色グラス香木見入る

よく歩き柿の葉寿司と奈良漬けのランチを求め奈良を満喫す  
ガラス器は戸棚にしまい厚手の小鉢に里芋を盛る

出来るなら蓑虫のような蓑が欲し酷寒一ヶ月ひたすら眠る

ヤブリ 哈爾浜の夜

永 野 雅 子☆ 東京

並布力から特急に乗り哈爾浜へ市内に戻りて夜の散策

すれ違う観光客に揉まれつつ日本語話す我異邦人

美味しいと評判の店でボルシチやピロシキ食し満足満足

川縁に集まる人は対岸へのレーザーショーに歓声揚げる

ホテルにて荷物整理の最中にスーツケースが開かぬと義妹言う  
フロントのスタッフ駆けつけ十五分奮闘の末スーツケース開く

終点の駅で目にした人の群れ我初めて人流見たり

川 上 美智子☆ 高知

電話にも声に力の戻りたり病床の歌の友癒えゆく兆し

前向きにリハビリ励むと聞きたれば曇りたる空晴れゆく如し  
公園に立てば広々見ゆる空回んだ気持ちたちまちに消ゆ  
黄金の光返して眩しかり陽を浴びて散る公園の銀杏  
小春日和の林の中に野鳥らが声張り上げて我が視野よぎる  
椎の木の葉陰飛び交うヒヨドリの悲鳴のような甲高き声  
胸痛む報道有りし熊被害ここにも放置の柿の実たわわ  
北の地の熊の被害を憂うさまアナウンサーの声にも伝わる

川 俣 美治子☆ 栃木

掃除終え窓そのままに開け放ち冬の光と冷気を浴びたり  
仏壇に供えたる山茶花はな開き父母の写真に季節知らせむ  
枝下ろし寒々とした街路樹は心許なげに春待ちて立つ  
仕様書と買い替えパソコン前にして期待大なるも不安が勝てり  
炬燵にて外の寒さも気にせずにカチカチアイス思わずうまし  
ハイチーズ孫に誘われ炬燵にて五十の違いも目だけは似たる  
檸檬色透き通るよ月仰ぎ己れを抱きて身震いひとつ  
風呂上がりクリーム多めに塗れる手の若がえりたるを含み笑いす

大 野 茜 神奈川

耐へられぬ熱暑避けたく日傘買ふ少しやはらぎバス停に立つ  
涼求め支笏湖畔に宿をとる友よりライン我は汗拭く  
掠れたる声を治さんと妻通ふ歌の教室定員を超ゆ

風に乗りサッカー応援聞こえ来るオーオーとゴール間近か

評判の映画「国宝」三時間息飲む舞の鷺娘の恋

スマホ操作解らぬ事の多くあり何度も試して半日を過ぐ

炎天に生け垣を刈る職人に大事無きかと冷や水を運ぶ

小林貞子 山形

十日夜の月は夕べの中天に土星と並び黄に輝きぬ

十日夜に田の神山へ帰るとふ膨らな半月御座照らすらむ

大根は十日夜まで太るとか青葉生き生き烟に二畦

十日夜夕明りして良き兆しあした晴れなば大根引かむ

株立ちて香り清しきセロリーの濃緑の葉は雪にくきやか

をさなゆゑ罠に掛かるも放されし人は易しと習ふか熊よ

老い二人暮れの障子を張替へて喪の家うちを明く設ふ

松籟を聞く町に住み震度五の揺れを耐へたる孫の伝言

本間志津子 山形

吹浦の十六羅漢へ紅葉狩り吾が生日の晴れ渡る午後

県北へ進むにつれて鳥海山間に迫り視界を広ぐ

中腹にかかるほのかな紅は紅葉の木木と肉眼に知る

空と海一つとなりて光りつつ水平線に「飛鳥」の細し

吹浦港に小型漁船の数多く西に傾く陽光まばゆし

鳥一羽竜巻き警報知らぬげに向ひの家のアンテナに居る

風の中雷鳴一つ轟けば驟雨音立て走るがに来る  
急に止み又激しさをくりかへす冬へ向かふか霜月の雨

高橋燿子☆埼玉

大方の夫の日程聞く卓に漂う茶の香吾の好物

犬が先夫が先競り合いの畦の小道も枯野になり行く

バスに乗り買い物あとはお目当てのスタバのコーヒーほうびのごとく

五、六分歩けば馴染みの喫茶店閉店してもその名忘れず

元気でね互いに交わす言葉にも歳を重ねた重み増しきて

四日間娘が来るという計画を書き出してまつ常に出来ぬこと

人形の音楽隊のクリスマス指折りでまつ息子の招待

アメリカでぐるみ割りの人形を観た感動をいまだ忘れず

野崎礼子☆埼玉

青天の霹靂とはこのことか元気な夫が癌告知受く

神社の鳥居をくぐる入院の日冬陽おだやか夫を包む

朝八時手術始まり八時間携帯を前にただ時を待つ

盛り上がり憎き顔した癌細胞パソコンの画面にはつきり映る

五日目に痛み漸く和らいで夫の枕辺に「巡礼の旅」の本

皿数の減りたる一人の食卓ああ「孤食」とはこういうことか

MRIイエスタディ流れて始まりぬ閉塞の中耳に心地良し  
冬陽浴びデンマークカクタスほころびぬ一時の美を窓辺に楽しむ

## 十二月号作品一評

小林 芳枝

母親の死をたんと甥は告げ延命治療を辞退したと 正田フミエ☆ 延命治療を断つた甥御さんの苦しさが思われて同じ経験をした私なども辛くなれる。姉を失つた作者は猶更であろう。初句は「母」で良い。三句は「甥は告ぐ」としてもよかつたか。

今頃は矢島さんに会い支部の事歌の事など話し居るらん 齋藤トミ子☆ 東京から佐野に移り冬雷佐野支部を立ち上げた矢島芳子氏を知る人は少なくなつたが矢島氏の後の佐野支部を纏めた高松ひさ氏の追悼歌である。一度お会いしたことがあるが元気で熱心な方であつた。現在も皆さんの交流は続いている。九十八歳。ご冥福をお祈りします。

一メートル以上伸びたる下草が刈られ街路樹衣替えのよう 浜田はるみ☆ 伸び放題だった下草が刈られて埋もれていた街路樹の幹がスッキリと立つ姿を

### 十二月号作品一評

藤田 夏見

ゴロゴロのコロッケのやま何のその五十個一日でペロリ平らぐ 田中祐子☆ 食べ盛り成長盛りの児童と一緒に作つたコロッケだ。筆者も同様に作りその旺盛な食欲にふれてきた。雨の日の孫達との時間に始まつた二日かかりの腹一杯の記憶は互いに残るだろう。ゆでたての卵の好きな妹の来る時に合わせ三個ゆでてる 矢野 操☆

老年となり姉妹が元気で行き来しながら、お互いの好物を支度する。三個のうち一個は作者が二個を妹に、ぬくぬくを食べる姿を想像。

くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ窓の吾れの友達 松中賀代☆

ここでは街灯ではなく、暗闇の田舎の外を燈すものか。眠れぬ夜は窓辺を照らすあかりを信頼できる友のようにして静かに思いを巡らせる作者。

水面をみつめ動かぬ青鷺の次の一瞬く

衣替えに警えて清々しい。上句を整理して 街路樹の名を入れてもよかつたか。秋分の日に盛岡の靈園で次男一家を待つ長子と共に

岩渕綾子

墓参は家族で賑やかに行きたいと思つている。思い出話をしながら墓の掃除をしたり線香を分け合うのも楽しい。家族が揃う喜びがみえる。

末の子を亡くし夫は何おもふ我とて同じ秋の風たつ 倉浪ゆみ

言葉にすれば崩れてしまうかもしれないものを抱えながらの日々。何も言わなくともいいのだろう。時間と言う薬がお二人の心に届く時が来るまでは。

病床に山鳩の声今朝も聞く水辺の近くで元気に生きろ 松中賀代☆

体調を崩して寝ている時に聞こえる山鳩の鳴き声、元気な時に近くで見ていたその姿を想像しながら心の中で声掛けをする。下句は少し乱暴だが温かい。

百均のメガネを壊し買ひくるも夫は修理しました一つ増やす 鈴木やよい

メガネは私も幾つか持つてあるが、どう

れも大切で必要である。急に壊れて買つて来たけれど修理ができたら捨てられない気持はよく解る。使い慣れて身体の一部分みたいな物である。

独り住む独りの家に目の覚めて独りにあらずと思ふ日につく 稲津孝子

一人になつて暮らしている家には嘗て子供が遊び父母が居て夫が居た。ちょっと

と思い出すだけで蘇る家族の姿がある。

「独りにあらず」なのである。

両隣わが家の犬も居なくなり見知らぬ白き猫が庭ゆく 須藤紀子

同じ頃に飼われた犬だろうか。みんなくてもいいのだろう。時間と言葉がお二人の心に届く時が来るまでは。

居なくなつてしまつて庭を何処かの猫が歩いている様子は何とも寂しい。犬も人も

もこうして移り変わつてゆくのかもしれないという感じがする。

六十年一度も休まず歌を出しここに立てりと赤間氏語る 石渡静夫

大会で最高点に輝いた赤間氏の「一度も休まず」という言葉には特に重みがあつ

て会場に居た私なども感動した。欠詠をしないことが何より大切なのである。

差しを避けることなく 大塚照美  
過酷とも言うべきこの夏を過ごしほんの少し季節が動いた頃。玄関を出た瞬間の作者の日常に今日は柔らかな日差し、空気が漂い始めたのですね。

お疲れ様と右手振る友歩行器をゆっくり押して帰り行きたり 江藤ひさ子

体の不自由が出る老年となつても明るい明日は来るはず。と気持ちよく読みました。

歌はまず分かることだと大山氏私の歌

は分からぬとも言ふ 石渡静夫

冬雷大会。歌の批評の一場面そこを切り取つた一首。歌に対する作者の真摯な姿勢がうかがえる一首。

ちばしに魚 鈴木やよい  
じつと動かぬ姿勢の青鷺は置物なのかと思う、その瞬間に嘴に魚を掴みするりと呑み込む。その一瞬を捉えた一首。震災とコロナ禍乗り越え二十四年どこか皆んなは誇らしく見ゆ 村上美江  
結句の「誇らしく見ゆ」は作者の気持ちそのものでしようか。この四半世紀は言葉にならない程の辛苦を舐めて来られた。みんなはと詠まれているがそれ以上に作者の想いそのものの歌です。

玄関を出づれば顔の涼しかり手にて日々のめでたさですね。

差しを避けることなく 大塚照美  
過酷とも言うべきこの夏を過ごしほん

の少し季節が動いた頃。玄関を出た瞬間の作者の日常に今日は柔らかな日差し、空気が漂い始めたのですね。

お疲れ様と右手振る友歩行器をゆっくり押して帰り行きたり 江藤ひさ子

体の不自由が出る老年となつても明るい明日は来るはず。と気持ちよく読みました。

歌はまず分かることだと大山氏私の歌

は分からぬとも言ふ 石渡静夫

冬雷大会。歌の批評の一場面そこを切り取つた一首。歌に対する作者の真摯な姿勢がうかがえる一首。

# 二月集

梶尾栄子 兵庫

朝よりあれやこれやと重なりて鳴門の渦潮のごとき一日  
間違へて炊きたる三合仏へも大盛りとなる今日のお供は  
ワクチンを待つ人の列できぱきと前段取りの指示ありて進む  
金色の銀杏に眼の向く吾を叱る高齢者講習受けしばかりに  
信号を待つ間に浮かび書く短歌の半分程にて青に変はりぬ  
切りて来て見るともなしに眼をやれば動く虫をり菊の花の上  
緊急時避難場所にと指定さる広き敷地に草もみぢして  
良き便り届きて一日胸の内さざ波立ちて落ち着かずゐる

山崎

猛☆埼玉

警報の続く北国の人々は雪の舞うなか備品積み込む

初詣さそいし友は今は亡く古きお札を一人纏める  
雪つりを終わりて冬待つ兼六園遠き日に来し母を思いつ  
冬至湯にからだ休める楽しみに近所の柚子が今年も届く  
本棚の色変わりたるはがき見て母のたよりに目頭うるむ  
十年ぶりに会う友皺や白髪増え会話となればげき飛ばしあう

久々の休みはひと日一人にてカツプラーメン作りて食べぬ  
公園のイチヨウの落ち葉と木枯らしに押されて吾は家路を急ぐ

高藤朱美☆茨城

豆苗の二度目の収穫楽しみに少し長めに残し水差す  
ローマへの道は遙かに遠過ぎて娘と女孫と飛ぶは徳島  
海上を真っ赤に染めて日が昇る鳴門の海も渦も穩やか  
山中を切り開きたる美の館「大塚国際美術館」入る  
柔らかな色彩輝くシスティーナホール見上げつつ時を忘るる  
聖書と典礼の絵多しなじみの画との出会いに感謝す  
モナ・リザと共に写真に収まりて見られた喜び孫等と分つ  
淡路産を息子の勧めし記憶あり道の駅にてめざす玉ねぎ  
四日振り波打つように菊咲きて我の帰宅を迎えくれたり

藤田英輔☆高知

扇形の雌雄異株の落ち葉踏み黄に染まりいる二歳児の秋  
あと一つ何処に在ると探す児の四十ピースのジグソー・パズル  
母と児の二人で囮む鍋の中に厚揚げの黄とグレイのこんにゃく  
今冬は青木の赤き実を食べて葉叢に遊ぶ鳥の姿見ず  
嘴は大きく固く靴のごとハシビロコウは歩くこと無く

一位の樹に鶴遊ぶ立冬の陽の柔らかく背中温まる

佐藤幸子 山形

黄金色に輝く公孫樹の並木路に緑のままの一本あるも  
三千粒の大蒜植ゑ終へ疲れ果て玄関開ける足がふらつく  
来年のことはともかく秋晴れの山の畠に今日引く大根  
猪は熊はどうかと切れ間なく診察待つ間の会話の尽きず  
もし熊がと不安に駆られ二百個の干し柿を二階ベランダに運ぶ  
友は食用菊われは薩摩芋なり交換し「得したみたい」と互ひに笑ふ

井 上 鈴 子 山形

庭の木の囲ひをしたる小春日に男結びの兄を思ひぬ  
木々の葉のすつかり落ちて道路より見ゆる山小屋兄建てし小屋  
喜雲寺の本尊供養は賑はひて本堂に響くソプラノの声  
落ち葉掃きミツキーマウスの顔描く下校の児らが気づきて燥ぐ  
銀色の豊けき薄の穂の群れは真つ赤なもみぢと並びてそよぐ  
背に温き陽を受けながら三十個のチューリップ植う色はわからず  
午後十時の電話に胸の騒ぎたり震へる声の姉の知らせよ  
二か月前秋保温泉に共に行きし赤き橋前の写真の笑顔  
三本の高速道行く五時間のち棺の義兄は微笑みて見ゆ

塙 本 節 子☆ 茨城

産卵を控えたる螳螂玄関にじつとしている二日のあいだ  
螳螂にそこではだめようと声かけて草むらに放てり十月みそかに  
三つずつ紐で縛りて蜂屋柿十本吊しぬ小春日和に

干し柿の三週間後の仕上がりを五歳の孫は今かと待ちおり  
長月はじめに種を蒔いたるひまわりは霜月はつかいま花咲けり  
小春日の柔らかき陽ざし受けながらひまわり咲けり俯きかげんに  
羽 田 孝 輝 山形

小春日に赤や黄色の葉裏より透かし見る空真つ青な空  
小春日は昼飯食べず時惜しみ冬の仕度に追はれ暮れゆく  
小春日に雪囲ひする手を休め真つ青な空仰ぎ見る午後  
容赦なく親も子もなくみな殺す駆除といふ名の熊の対策  
熊たちよ里に来るなら夜に来い昼は隠れて歩き回るな  
日本中毎日どこかで熊たちが駆除といはれて殺さるる秋  
熊らにも子ども食堂開きたし山の畠の柿の実残す  
綱吉はこの熊対策如何様に考へ得るか尋ねたき秋

金 子 八重子☆ 千葉

値下がりを待つて間に匂の過ぎ食べ損ねたりゆでおおまさり  
一セソチ背丈縮みて見上ぐれば孫との背比べ頭なでらる  
熟すのを待てずにかじった次郎柿兄と登りし里の柿の木  
度々の発注ミスに手間の増え指摘はせずにモヤモヤの募る  
冬ワード予報に増えてダウン出す寒波到来北に初雪  
三百六十五日は壁に吊されて何があつても順番に来る  
卵かけご飯は今でも特別で少し構えて夢中で食べおり

## 第64回 冬雷大会詠草 短評付き（二首選）

令和七年十月十二日（日）午前十時（受付開始九時半）  
於 ホテルルートイン東京東陽町

**短評分担** 1～32 大山敏夫・33～64 桜井美保子・65～97 小林芳枝

（作者名下の数字は互選得票）

- 1 先立たれ後追う心に友飛んだバンジージャンプを谷の底へと ☆ 新井光雄5  
　　1 上句は友の言葉。絶対安全が保証された物なので、勇気をふるったのか。
- 2 「高嶺」より「冬雷」に入りし二十五人の年年へりて今は十四人 三好規子1  
　　2 年月がそうさせて寂しい。作者を含めて現役の方々に頑張つてほしい。
- 3 なるやうにしかならないものと思ひつつビデオ会議の発言を聞く 石渡静夫4  
　　3 ある意味冷めた作者。直接対面での会議なら違うのかも、と思わせる。
- 4 朝になればなべてリセットなるやうに足裏のたこ揉みて眠りぬ 井上菅子3  
　　4 作者の願いはよく解る。しかし、それは無理でも下句の躰の手入れは必要。
- 5 雨あがり暗渠の道の草むらに先導として黄揚羽とぶ 嶋田正之6  
　　5 この「先導」は何かの特別な時の歩み。結句は「きいあげは」と読むのか。
- 6 カレーとは家庭の味だ辛口は息子が作る婿は甘口 ☆ 藤田夏見2  
　　6 昔のままにカレー粉から作るならその家の味。甘口カレーは子供向けか。
- 7 死きあととのバツグ受け継ぎ學習に持つたび思ふ母の後押し 井上楳子5  
　　7 上の句と結句が美しく呼応してこころの通つた一首。

震災後三度の入院しかれどもベッドに座して短歌を綴りぬ 岩渕綾子8  
　　8 あの大地震から十四年、その間三度も入院され短歌に支えられたようだ。

鉤針を引き抜く糸の感触をたしかめながら細編み進む 小林芳枝5  
　　9 体験がなく分からぬが、何でも丁寧に確實に一つずつ：の作者の様だ。

嫁ぎきて庭の桜と五十五年幹は太りぬ地蔵の前に 稲津孝子7  
　　10 五十五年の歳月と桜の大樹、作者の重い存在感もあり、庭の地蔵も凄い。

長襦袢の鶴色好む母なりし朝明けの空いま母のいろ 梶尾栄子12  
　　11 何と粋なお母様だったのか。下の句の展開もほのぼの。三句は「き」か。

このまちに土筆つんつん生ふ如くタワーマンション建ち行く令和 櫻井一江10  
　　12 「つんづん」は新しくないが、都心のタワーマン建設状況に繋がると迫力ある。

早口の台詞書きとりにくくなり音量上げず字幕にて見る 桜井美保子9  
　　13 何でも便利な時代へ向かつてゆく。テレビでも機能様々だ。

エレベーター「開」のボタンを押し続け少年は我を待ちゐてくれる 赤間洋子24  
　　14 ちょっとした配慮、親切に打たれる作者。口語ふうながら締まつてゐる。

砂時計ひつくり返せば未來へとさらさらさらと時を流せり 田端五百子13  
　　15 こんなふうに歌えるのは生き方に余裕ある証拠。さらさらさらと在りたい。

ネモフィラの和名は瑠璃唐草と入選歌より我は知りたり 倉浪ゆみ0  
　　16 願わくは何かの入選歌ではなく、辞書か何かで知つた作者が歌つて欲しい。

九十六の叔母と面会し飾られたる習字の特選に足跡を知る 津田美知子1  
　　17 全体に丁寧に表現したいとする意思が見える。それは良いが、余韻に欠けた。

「月のホテル」の真上に円き月が見ゆ兄の法要終はりたる夕 井上鈴子1  
　　18 初句は実在するホテル名か。その真上の月を観て兄を忍ぶ作者が浮かぶ。

母に手を引かるるをさな目の合へるわれを幾度も振り返りゆく 鈴木計子9  
　　19 街でのちょっとした体験。粘着力をもつて写生した作者をたたえたい。

全国大会に参加して



河原本光子

分かり勉強になります。参加者の短歌  
愛を感じました。

今回私は  
十代に胸に残りし出会いあり還暦  
過ぎて歌詠み初める  
を出しました。高校生の時に母が読ん  
でいた婦人誌の投稿欄の一首の歌に目  
がとまりました。それは  
大空に生れては消える白き雲一人  
自在に生きたくなりぬ  
という歌でした。若い方の作品とあり  
ましたが、短歌の魅力を感じました。  
歌に書かれた風景を想像してみまし  
た。五十数年前に一度目にした歌です  
が、それから何度も胸に蘇っています。  
二十代の社会人の時に職場の文化祭  
の作品出展を依頼され短歌を作つて出  
しました。三十一文字に自分の思いを  
綴るのが難しいと思いました。その後  
結婚子育て介護と自分の時間がそれな  
い生活でしたが、その中での樂しみは  
新聞の文芸欄の短歌を読むことでし  
た。作者がどんな思いでその歌を詠ん  
だのか、歌で表現された情景を想像す  
るのが樂しみでした。

20	晴れ渡り今日午後退院あの道を自宅に向かう笑顔で挨拶 ☆	安川敏子 3
21	折をりの友の電話の注告にて話しかけるは駄目よ人形は 21 結句は、やはり話し相手には人間を選びなさい、という忠告のようだ。	大塚照美 0
22	近辺の芥収集所に食い散らす団太い鳥に突如出喰わす ☆	乾 義江 0
23	橋渡りきたれば目に入る海紅豆二度目の花の今盛りなり	森藤ふみ 2
24	友のしかたないなと云ふ声の指示に教はるスマホの操作	青木初子 4
25	山沿いの集落行けば空き家増え主無き庭に山百合は咲く ☆	永光徳子 11
26	朝ドラの「あんぱん」に妻は涙して番組終はればくるりと厨	大野 茜 1
27	表紙絵に木槿の咲く夏入会す今年も庭の淡桃咲きそむ	西村邦子 1
28	献立を思いあぐねて師の詠みし蒟蒻としめじの煮物閃く ☆	川上美智子 2
29	槿花咲く戦の日日も暑かりき八十年経たる今日のこの日も	本間志津子 9
30	明日よりは彼岸に入りぬ造花をば生花に代へむ出でゆくなり	佐々木政子 0
31	身丈また縮みたるらしあな悔し隣の幸ちやん大きく見ゆる	奥山清子 5
31	「あな悔し」が生きている。自身のマイナス点も奮起材料に頑張つてほしい。	
32	夕顔の実を赤子抱くやう受け取りて初物なれば膳に供はむ	児珠純子 5
32	大きな実なので上句は感じが出ている。結句は「供へむ」が普通か。	
33	マッチングしましたなんぞいひて来る何も調べてをらざる証し	稲田正康 1
33	メールでのマッチングの誘いを不要とする切り返しが鮮やかだ。	
34	衣食住足りて目指すは若さらし我には不要笑顔が大事 ☆	加藤富子 2
34	若く見せるための商品や方法は不要。笑顔が一番だ。賛成である。	
35	空腹が中華の油欲しがつて回鍋肉の箸が止まらん ☆	金子八重子 6
35	上句 空腹を主語にしたところがユニーク。口語表現で楽しい歌。	
36	チュウリップまつかに咲いて遠い日によつて帰つた父思ひ出す	畠田真紀恵 1
36	四句は「酔つて」か「寄つて」か。今も心に残るその日の父の姿。	
37	五十年居場所をさがし紙上より凡夫はほとけわが身ををがむ	矢野 操 0
37	仏教の深い教えが歌の底に。心を磨きながら生きる姿勢と努力。	
38	ひと匙ほどの残飯撒けば雀どち集ひてつつくそれの忽ち	江藤ひさ子 1
38	雀との対話は作者の愛情と優しさから生まれるのだろう。	
39	老いてなお日々成長の心意気いくつになつても挑戦忘れず ☆	後藤恭介 13
39	励まされるような歌。何に挑戦しているのか具体的表現がほしい。	
40	災害時助けられたる備蓄米古古古米まであること知らず ☆	高藤朱美 8
40	米問題で備蓄米が放出され 古い米の存在を知った驚き。	
41	今ここに何をする為来たのだらうぢつと佇みぢつと考ふ	松居光子 12
41	「ぢつと」の繰返しが効いている。飘々とした味わいがある。	
42	子らと来て遊びし川は変わりなく二人で見やる生ひ茂る草 ☆	鈴木やよい 5
42	自然の景は変わらないが人生は歳月とともに変わって行く。	
43	人生のあと僅かな岸に腿手術試練とおもい励むりハビリ ☆	児玉孝子 1
43	歳を重ねてからの手術に耐え、リハビリに励む姿に感動する。	

六十代になり中国新聞の文化教室の短歌の教室で学び、現在は稻葉(多賀)陽美先生の指導のもと藤田夏見さん含め四人で学んでいます。冬雷の参加は多賀先生と藤田さんに勧められ入会しました。

今回の批評の中で「歌を目で読むだけなく声に出して読むことが大事」とありました。今まで歌ができた後に何回か声にして読むと上句の言葉と下句の言葉を入れかえた方がいい歌になりました。最初はなぜ意味不明なのかが分かりませんでした。自分自身だけが大事なのだと分かりました。

また「自己満足でなく読んだ人が理解できる歌作りをする」とありました。恥ずかしい事ですが大山さんから何回か「この歌は意味不明です」と指摘されました。最初はなぜ意味不明なのかが分かりませんでした。自分自身だけに分かる表現で作り、読み手の目線を考えないのでないのだと思います。これは私の課題として取り組んでいこうと思いました。

その他にも「しつかり観察する」と、歌の中に難しい漢字がたくさんありました。

今年の大会では赤間洋子氏の作品が互選一位となつた。

エレベーター「開」のボタンを押し続け少年は我を待ちゐてくれる

という一首。これを受けて会場では赤間氏の受賞の挨拶も行われた。その様



高山と水辺の動画流しつつソファーに横たふ外は灼熱

猛暑日を自宅で過ごす心地良さ。

68 フリフリのピンクの水着に夏帽子二歳の水浴びおもいっきり夏

69 水遊びの幼子を見ながら夏の醍醐味を満喫している。☆

70 横向きのカサブランカはかをりたち吾を釘付けにす「花嫁御寮」

70 花嫁のブーケだろうか。四句は入れなくとも良かったか。

71 つい涙「はだしのゲン」を読み終わる遠く聞こえる祭囃子の音☆

71 初句は「涙して」と下句に繋げたい。全体に句切れが多い。

72 邂逅の友と懐古を偲びつつ共に生きる身の安寧を祈る☆

72 熟語に頼りすぎているようで実感が乏しい。

73 古き枝に今年の枝に金柑の蕾ひらきて夏近くなる☆

73 金柑は庭にあるのだろう。結句で纏まっている。

74 必着の文字に慌てて見る歴今日がその日ぞ詠草期日

74 ちょっと油断するところのような事になりやすい。

75 友は言う私これからどうなるの中学生からの強き人なり

75 友の弱気な言葉に戸惑いながら立ち直りを信じる心がみえる。

76 手のひらサイズから大猫に育ちたる捨て猫おまへの親とはどんな

76 少し乱暴な言い方ながら可愛いがついている気持ちが伝わる。

77 夕暮れて子ども見えぬ公園のブランコのそばモジズリひとつ

77 ブランコのそばのモジズリは落ちているようにも感じられる。

78 桑の実を籠いっぱいに摘みたるとさとのあねさま声彈む朝☆

78 電話の人に対して「さとのあねさま」という表現が温かい。

79 ポケットに『ゼロの焦点』押し込んで断崖に立つ青春に返る

79 若き日の感動をもう一度。断崖の上で「青春に返る」作者。

中村晴美 1  
江波戸愛子 4  
高松美智子 9  
村上美江 0  
首藤文江 1  
山崎 猛 2  
立石節子 2  
穂積千代 4  
橘 美千代 0  
田中祐子 7  
齋鹿ミヤコ 10  
長谷川 剛 3

あるとき、「欠詠は自殺行為なり」との一言を編集後記に見出し、これはいけないと出詠を再開しましたが、たちまち息切れしてまた欠詠が続いてしまい（略）昭和54年の秋に出詠を再開してから今日に至っております。私は今まで例会に出席したことがなく全く自分本位の歌ばかり作っておりましたが、小林芳枝様の綴込歌集の合同批評会に出席して会員の皆様の暖かい雰囲気を感じてから、可能な限り例会に出席して勉強したいと思ふようになりました。

これは大事である。現在の会員の皆様もこうした経験談を尊重して欲しい。何も赤間氏の話の腰を折るつもりではないが過去を辿つたらこうなった。しかし、確かに欠詠は「自殺行為」と亡き師匠は言って居られたものの、かく

日本人の犠牲者は多く340万人その死者の上に平和が成り立つ（第二次世界大戦）兼目 久6

80 戦争をせずに平和が成り立つことが望ましいのだが難しい。

81 二歳児はパステル色のたたずまいビビッドな絵の具を隠し持つ

81 絵具に贅えて幼児の未来を予想する。夢いっぱい楽しみ。☆

藤田英輔 3

82 ブラッシングする度抜ける毛の数多又も擦り寄り腹見せる猫☆

齊藤トミ子 1

82 甘えん坊の猫と丁寧に手入れをする作者との至福のとき。

浜田はるみ 2

83 口笛も指鳴らしも今ではとっさに出来ぬと知りて驚く☆

松田忠一 8

83 得意だった事が何時の間にかできなくなっている事にびっくり。

浜田はるみ 2

84 奥山の蓮華温泉は自家発電の宿夜の九時には電気が消える☆

卯嶋貴子 1

84 電気が貴重な山奥の宿。三句切れにしても良かったのでは。

85 洋々と流れる銀河に浸りたし真夏の夢想猛暑の日々に☆

星野一郎 8

85 昼も夜も暑かった今年の夏の空想。

早乙女イチ 2

86 さわやかな若葉の中にキンカンが大豆ぐらいの大きさとなる☆

高橋耀子 3

86 ずっと見てきたのだろう。「大豆ぐらい」に楽しみがある。

山口 嵩 12

87 蝋や母の足音聞きながら里に目覚めた頃有難し☆

小林貞子 8

87 子供の頃を思い出し乍ら今になつて知る「有難し」である。

山崎英子 4

88 台風の余波なる雨もやがて止み実なき穂ゆれてひび割る田に

赤間洋子 3

88 救いの雨とはならなかつたのか、少し落胆しているようだ。

赤間洋子 3

89 悪さする猿に思はず叫ぶ姉「その子落すなしつかりと抱け」

赤間洋子 3

89 子を抱く猿に思わず注告する。母の思いが猿に向けられた。

赤間洋子 3

90 六体の地蔵の並ぶ寺庭は心に安らぎをくれる場所であろう。

赤間洋子 3

ガザの飢餓平和を謳歌する我ら目をそむけてはならぬ懇願を

植松千恵子 5

91 手を貸さなくてはならないという強い思いが伝わる。

植松千恵子 5

物が人によつて異なる場合もある。左

# 日本歌人クラブ 会員2000人 全国規模の親睦団体

短歌を愛好する方ならどなたでも入会できます。  
昭和23年創立「歌人相互の親睦」と「歌壇の発展」のために活動しています。

主な活動

- 全日本短歌大会
  - 会誌「風」(活動報告・会員の作品・他)
  - 日本歌人クラブ各賞の設定
  - 全国12ブロックでの大会開催
  - 地域優良歌集の表彰
  - 『現代万葉集』(1300名超のアンソロジー)

〒141-0022 東京都品川区東五反田 1-12-5 秀栄ビル 2F  
TEL : 03-3280-2986 FAX : 03-3280-3249  
ホームページ <http://www.kajinclub.com/>

問い合わせ先

◆創業1948年、詩歌と共に77年！伝統と信頼の飯塚書店が出版する短歌関連書◆

# 短歌文法入門

# 短歌用語辞典

# 恋の短歌コレクション1000

固有名詞の短歌  
日本短歌  
1430

メタリック  
眩い  
あざらなこ  
玲瓈と  
形容詞  
形容動詞の  
短歌コレクション  
1000  
日本書院新社

形容詞・形容動詞の  
短歌コレクション1000

四六判 1430円（税込）

シニヤム

九月

形容動詞

100

92	ぴかぴかの紅葉マークを車に付けスープー寄りで譲られる道 ☆☆☆	正田フミエ3
93	高齢者マークの安心感。「スーパーに寄り」が具体的で良い。	
94	一年振り帰国の次男の車にて志津よりあふぐ月山の靈氣	
95	負傷した弟に代わり鍋を振る疲労困憊三日目の夜	永野雅子0
96	歩数からスマホに示さる体内年齢十五も若く尚歩きたし	水澤タカ子0
97	美しく老いるを願ふも所詮なしさにあこがる椿ちるがに	
98	95 体は変つても心の美しさは保てる。希望は持ち続けよう。	
99	96 さすらいの日々遠ざかりつきたての餅の形に猫いま眠る	酒向陸江1
100	97 安心して眠つている猫。下句の比喩が効いている。	東 ミチ9
	互選での上位作品	
1位	赤間 洋子 エレベーター「開」のボタンを押し続け少年は我を待ちゐてくれる	24
2位	塚本 節子 九千キロ海越えてゆくふしぎさの息子へのライン銀河をまたぐ☆	15
3位	田端五百子 砂時計ひつくり返せば未来へとさらさらと時を流せり	13
4位	後藤 恭介 老いてなお日々成長の心意気いくつになつても挑戦忘れず☆	13
5位	梶尾 栄子 長襦袢の鵠色好む母なりし朝明けの空いま母のいろ	13
6位	松居 光子 今ここに何をする為来たのだらうぢつと佇みぢつと考ふ	12
7位	山口 嵩 台風の余波なる雨もやがて止み実なき穂ゆれてひび割るる田に	12
8位	永光 徳子 山沿いの集落行けば空き家増え主無き庭に山百合は咲く☆	12
9位	野崎 礼子 友の手に年季の染みた辞書一つ言葉の道をこつこつとゆく☆	12
10位	櫻井 一江 このまちに土筆つんつん生ふ如くタワーマンション建ち行く令和	10



## 十二月号作品二評

井上 菅子

涼風の街のゆく手に数多なる百日紅咲く季節となりぬ

本間志津子

「涼風の街」気持のよい歌い出しで

その先には百日紅の咲く風景。百日紅に

彩られる季節の切り取りに詩情がある。

見の限り今年の稻の作柄は良と言ふべし

稻穂重たげ

稻穂が重たげに穗を垂れているから

今年の作柄は良だと言う。目視は確かだ

ろう。米の価格が高騰している昨今、力

強いエールをもらった思いがする。

老いるのは我が身のみならず家ぬちに

漏水ありて待つたのきかず 東 ミチ

年を経ることは、己の身体と共に家屋も古りてゆくこと。必定のこととはいえ

つらいことである。「待つたのきかず」

には、悲痛な叫びが聞こえる。

身近にはススキも今は見当たらず十五

夜の月に寂しいねと言う 川俣美治子☆

かつて身近にあった芭も、宅地造成や

## 十二月号作品二評

江波戸 愛子

帰京する孫に酒田を知らしめむ本間美術館共に訪ひたり

本間志津子

敗戦後GHQの示唆により財閥解体な

され八十年

本間志津子

休暇をとつてきたお孫さんに酒田が市

になる前のことや戦前の本間家と戦後の

本間家について語り継いでゆかなければ

とのつよい思いが伝わつてくる。

小さくとも町工場を引き続きて孤軍奮闘の子見守るばかり

梶尾栄子

亡くなられたご主人のあとを継いでくれた息子さんへの感謝と、ひとりで工場をうごかす息子さんの体を気遣う母としての思いが結句によく判る。

電車内手話を使つて会話する離れた所で意思通じたり

植松千恵子☆

離れた席に座つたのは友達だろうか。手話のできるふたりだから声に出さなくても会話ができる。離れたところの友と心おきなく会話のできる喜びを詠む。

開発でその姿を消した。世の移り変りを月に向かって「寂しいね」と言う。月が身近なものとして親しみを込めている。

わが足の衰へ憂ひ呉るる子が転倒防止の録画送り来ぬ

松居光子

親を心配する子の思いが、「転倒防止の録画」と言う具体的な物を示してよく伝わる。無駄なく流れよく整っている。

過疎の町の海辺の荒れ庭オリーブの今

年たわわに実りておりぬ 藤田夏見☆

住む人の居なくなつた空き家の庭どう

うか。住人が居ても居なくても、オリーブは季節が巡れば実を生らす。荒れ庭とたわわに実るの落差に哀感がある。

過疎の町の海辺の荒れ庭オリーブの今

年たわわに実りておりぬ 藤田夏見☆

住む人の居なくなつた空き家の庭どう

うか。住人が居ても居なくても、オリーブは季節が巡れば実を生らす。荒れ庭とたわわに実るの落差に哀感がある。

丹精をこめて育てしさといもをくれる友あり掘りたてですと 小嶋知葉☆

「掘りたてです」この言葉だけで、丹精をこめて育てる人とわかる。友の言葉で生き生きと臨場感が伝わる。

「じいちゃんはとめられないね」と真剣に髪留めを我に付ける二歳児

藤田英輔☆

二歳児の言葉でじいちゃんの頭の様子

にも伝わる。

結婚の記念日近し長き時経て今がある

ケーキを買おう 川俣美治子☆

長いあいだ共に暮らしているといろい

だ。今年は豊作だったのかもしれない。

段ボール三箱分とれたよろこびが読む側

にも伝わる。

ミカンの実全部取つたら段ボール三箱

とれたうれしかつたな 早乙女イチ☆

庭のミカンの木の大きさが分かるよう

だ。今年は豊作だったのかもしれない。

段ボール三箱分とれたよろこびが読む側

にも伝わる。

結婚の記念日近し長き時経て今がある

ケーキを買おう 川俣美治子☆

長いあいだ共に暮らしているといろい

だ。今年は豊作だったのかもしれない。

段ボール三箱分とれたよろこびが読む側

にも伝わる。

がみえるようだ。

リハビリを兼ねたる夫の風呂掃除悔し

いけれど吾よりきれい 津田美知子

男性の方が掃除が丁寧という話を聞いたことをこの歌に思い出した。下の句に

お風呂掃除をかんべきに出来るようになつたご主人の回復を喜ぶ作者がうかぶ。

わが足の衰へ憂ひ呉るる子が転倒防止の録画送り来ぬ 松居光子

年を取るにつれて怖いのは転倒することではないだろうか、転倒防止の録画を

がわかる。二歳児が真剣であるところに、かわいさとおもしろさがある。

無花果を年ごと呉るる友人の乳癌手術

を帰り際に言う 児玉孝子☆

親しい友人なのに、いよいよの帰り際

に重大なことを告げる。心配をかけまい

という友の思いやりを捉えた。

海面の照り返しを受け、という作業の

様子が力強い生活感となり、そこに父を重ねた。写實で捉えた父の思い出が鮮明。

稻刈りもおほよそ終り庭の柿が色付き

初め秋進みゆく 井上鈴子

取り入れが済めば農村集落に静謐が訪れる。庭の柿の色付きに、一枚の日本画

を見るようだ。雪来る前の一ときの安らぎを詠む。

息絶えてなほ柔らかきかんばせの最も

凛凛しくなりて納まる 奥山清子

厳肅な場面を冷静に捉えた下の句。長

く共に暮した人だから、その表情の変化

も見逃さない。繊細さが悲しい。

敬老の日に

海面の照り返し受け日焼けした漁師の

顔に亡き父想ふ 松崎みき子

漁師さんの日焼けは海面の照り返しを

受けていることによるところの歌に教えていたいた。家族のために漁師として働いて亡くなつた父親を恋う。



## 作品二

小林芳枝 東京

逆さまにすれば出でくる蜂蜜のパンに沁み入る穏やかな朝  
夕暮れの部屋に短く鳴る音すファンヒーターのお手入れ合図  
急けたくなりたる時は立ちあがり熱々濃い目の珈琲を飲む  
昼過ぎて日だまりとなる仏壇の手前に笑顔の義姉さんを置く  
野菜室に長く置きたる大根を煮れば日暮れの部屋温まる  
南天も柚子も伐られて平らなる花壇のなかに冬の日溜まる  
泥濘にならず止みたる昨夜の雨ベランダの柵に雨粒ひかる  
インスタント食品並ぶ棚ありて此度も選ぶ佐野のラーメン  
東より差してくる陽に輝ける向かひのマンションに立つ避雷針

益坂順子 福岡

紅葉を見むと訪ひたる鞍岳の登山口より人の連なる  
とりどりのテントの見ゆる四季の里登山以外に楽しむ人の  
急登の疲れ忘るる頂に笑顔並びていつものポーズ  
感嘆の声となりたる竜胆と季節外れの深山霧島  
下山時に左右の樹々を見るゆとり赤き実数多サルトリイバラ

土曜日の予定間ひくる孫メール招待状を持参するらし  
十五年ぶりに登りたる作礼山期待違はぬ紅葉の美し  
芸術の森と名の付くひとところ逆さ紅葉漆の机に  
さながらに鞍部の池は上高地ゆつくり歩く落葉ふみつつ

東ミニチ青森

何故に海を泳ぐか必死の熊が陸まだ遠き沖にて撃たれる  
庭前の樹を楽しみてあたりしが飛び散る落葉を今片づける  
我が町は一級河川の河口なり現はるる熊よ無事に戻れよ  
庭の木に吊す干し柿の経過よしカラスのことなど頭に無くて  
往年の歌手達がうたふ番組を見ながら吾れの彼の頃しのぶ  
「歩かねば」其の一心で続け来て近頃少し心晴れくる

松居光子 三重

「転んだ時助けて下さった方ですか」見覚えのある人に声を掛けたり  
改めて礼を言ふこと適ひたり心足らひぬ小春日の午後  
病院の自動支払機に差し込んだカードの番号わからずなりぬ  
繰り返し四桁の番号入力するも決済できずパニックとなる  
仕方なく現金で払い帰るさに思ひ出したり暗証番号  
一時的な記憶障害だつたのか認知症が胸を過りぬ

この秋の桜の紅葉一段と紅の濃く輝きをりぬ

山本述子 神奈川

南天の実ふつくらと粒揃ひ秋ならではの豊かさ思ふ

二年前息子の葬儀に参列の甥同じ月日に訃報を受くる

独り居の甥を気にかけ二年経つ連絡もせずごめんなさいと

久し振りのグランドゴルフ二度ばかりホールインワン気分すつきり

森クラブ十人揃ひ忘年会自然大好き仲間大好き

蘭ハウス見学すれば広さあり交配されて五年後開花す

蘭談義聞けば聞く程面白く一鉢購入す真紅の新種

安川敏子☆埼玉

嬉しいを超えて驚く幸せは雨の中赤飯・手料理持ち呉る

歓びと笑顔が弾ける昼食会コロナ続けて油断はできず

空家あり三年過ぎて生垣の白い山茶花冬を知らせる

ガキン・ゴン首動かせば音がする気分は悪いが生きてる証拠

人間と利口なカラスの知恵くらべえさのない冬は真剣勝負

朝六時カラスの朝食ゴミ漁り道いいっぱいに散らかして飛ぶ

空家にたぬきも住みているらしく残飯生ゴミ広げてありぬ

立石節子☆ 東京

間食にたんぱく質をと言われしも無理に食して胃痛となりぬ

栄養士は市からの委託受けており食事指導と生活管理

歌の友退院後の歌会に補聴器忘れ司会も不自由

向い席の幼な子の目に吸い込まれ思わず手を振り笑顔を返す

藤田夏見☆ 広島

近所には知らせておきたる二人居は民生委員を頼みの綱に この家のふたり見守る民生委員言葉を選び近況話す

徘徊を聞きても深夜に飛び出せずかかる片道一時間半

徘徊に訳はあるらし安心と安全いうは容易いけれど

夢枕に従兄の立つという妻は待ちて帰らぬ夫を探す

「帰らないの」「亡くなつたよ」今日も又悦子さんと姉は従兄を言つてる

罪悪感心の隅に抱きゆく従兄の妻の入所計画

朝顔の影を落とせる縁側に小春日浴びてのど自慢聞く

児玉孝子☆ 愛知

僅かなるきつま芋掘り為しきれる息子夫婦に加わるひと時

土いじりなどせぬ嫁の長靴に出で立ちのよく一輪車ひく

元気アップに参加せんと支度する小春日和に紅淡くさし

報恩講に寺近ければ詣でたり和讚に声あげ縁を尊ぶ

玉葱をつくるに我が身に聞いてみる百本を買ひ独りで植え終う

バッテリーを替えて走行距離のびて用足す範囲広がるセニアカー

夕暮に落葉を拾うあと少しと作業し居れば知人手伝い呉る

小嶋知葉☆ 茨城

ひさびさに弟からの電話あり故郷にある土地のことなど

故郷に空き地となりて二十年「貸してほしい」という声のあり

故郷のバスも通わぬ土地なれど野菜販売の店にしたいと

今宵またプロジェクトXに熱くなる巨大な橋のかけ替えの技  
ラジオ深夜便今宵は牧水を語りたり寂しきことの深さの意味を  
樹木にも寿命があることまざまざと見せてわが家の松は枯れたり  
伐採し残りたる松の丸太三本並べて家の玄関に置く

卯 嶋 貴 子☆ 東京

力サカサに乾いた枯れ葉を踏みながら冷たい風に吹かれて歩く

奥 山 清 子 山形

寒き日の午後の小雨に流れたる豎琴の音「愛の贊歌」よ

立冬の朝の垣根に返り花薄桃色の朝顔二つ

隣人の三人寄りて「遊山会」おうなは語る恋の思ひ出

月光環の中に鎮座するスープームーン朝の四時には西空に浮く

目を奪ひ朝日に照れる黃金色西街道の銀杏の並木

夫の建てし八寸角の大黒柱地震の時もわれを守らむ

恙無く父看送りし息子にて喪主あいさつに涙止まらず

水 澤 タカ子 山形

一碗から平和をと呼びかけ世界へと茶道ひろめし千玄室師逝く

若き日に茶道を修めしわれに今も十五代千師の許状あまた

千玄室の特攻志願のなまの声CDかけて今まで聴き

上官よりの待機命令に生き残り百二歳まで天寿全うす

卒寿すぎ立ち居もすでにままならず御道具を寄附し終身会員  
この月をカリフォルニアの子の家族も見てをるらんか思へば愛し  
蔵王嶺に淡雪かかる翌日は緑と紅葉の錦絵のごと  
冬支度早目にはじめ大根掘り洗ふ水道の水暖かし

インフルエンザ 加藤 富子☆ 栃木

ワクチンを昨日接種し今日発熱医師は一言「無関係でしよう」

アウトレット散策もキルトの稽古もキヤンセルし家の中にてテレビ見ている

発熱を自覚したるは浮遊感体温計にて確認したり

ウイルスとの攻防二日目の夜に解熱はしたが勝負はつづく

食材の在庫なくなり買物を孫に頼みぬ未来の予習と

インフルエンザ猛威を奮え巴コロナウイルス息をひそめるどこにいるやら  
小学生の学級閉鎖は度々あれど学校閉鎖は初めてのこと

一週間のインフルエンザ完治して職場のスタッフ「お帰りなさい」と

津 田 美知子 岩手

久し振りに息子帰り来て「何食べる?」の答は何と鱈の塩汁  
値引き札の付きたるケーキふたつ買ふ年金暮しのプチ贅沢の

熊ぬぬか恐る恐るに開ける窓車は側の玄関の前

吾を叱りし父の厳しき大声の彼の愛の鞭今有り難し

障害の子の授かりて家族の輪と九歳までの泣き笑ひの日  
意識無き母はいきなり両の手を広げ誰かを迎へゐるやう

野 口 秀 子 山形

久に会ふ友の姿の膨らみに驚愕しては年数かぞふ  
友と語らふ昔の宿舎懐かしく心は遠き日を偲びゐる

村山の広大な景を将来に繋ぎたし春の田んぼと秋の稻穂と  
昔々の生家の前は青々と晴れどこまでも続く麦畑

雪吊りの中にはつほつ咲き染むるピンクの山茶花時雨に濡れて  
初雪となりたる朝に触れてみるピアノの音色冷えゆきて美し  
飾りなき食卓に置く山茶花のピンクの花二つ鮮やけし

松 崎 みき子 岩手

南天の実を啄むは椋鳥で柿もぎ取るは里山慣れの熊  
夜なべして柿を剥きゐて肩が凝り歳相応のほうれい線も  
白波の半島の沖秋来ても鮭はふるさとの川に戻らず  
最終のサンマ船着く市場前後方に輝く陽の帶曳きて  
チューリップの球根植ゑる来春は畠の隅に愛らしき花  
廃墟の小屋の屋根走りゆくテンを見る小動物がこの頃増えて  
大根で畑終ひの収穫日令和七年は百本となる

岩 村 知 康 長崎

町なかの並木も山も色づきて対馬の島の秋闌くるなり  
万葉に「対馬の嶺」とて詠まれたる有明山にけふぞ上らむ  
未だ見ざる有明山に思ひ馳せいま打ち立ちぬ裾の山口

麓より清水山へと入り行けばまづ差しかかる山城の跡  
崩垣の石の間の荒草に古りし代を思ふ二の丸の跡  
城跡ゆ望む沖辺の海峡に秋の霞の棚引きて居り  
おのづから照葉樹林に連なれる城山の道ふかく入り行く  
森を抜け視界ひらける傾斜には浅茅生のなか灌木の立つ  
上り來し「有明の嶺」の一帯を高く伸びたる群萱の占む

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

部屋部屋の空気孔締めて冬仕度心残りの秋過ぎ去りて  
スタッフに「いい湯でした」と言いそびれ次にと思う浴場口で  
旅に出るいつも座席は窓側で富士山見える恵那山見える  
一步ごと落ち葉踏むこの心地良さ朝焼けの空に心が弾む  
ラジオにて来年の干支の話聞き小さき置き物馬を探す

井 出 裕 子 静岡

勧められ來たる作陶展見るだけと決めてゐたるも心の搖らぐ

終活に収集の器処分して志野焼の皿ひとつ求めぬ

若き頃陶芸に挑み挫折後は収集と釜場巡りを楽しむ

陶芸家は元教師なり子らのため陶芸療法士の資格を持てり

我一人のギャラリーに作家はぽつぽつと作品を説く両手に抱きつつ

求めたる志野焼の皿に煮物盛り夕餉の卓が少し華やぐ  
我もまた老陶芸家見習ひて作歌続けむ悔いなきやうに

# 作口品二

十一月号 十首選  
冬雷集 益坂 順子

あやとりのからんだひもを手渡してほどいてくれとせがむ園児ら  
角野氏のピアノリサイタル満席でギネス記録に認定される

角野氏のギネス記録に参与する吾と父もまた客の一員

二年目の四世代旅みかん狩り父も孫もおいしさ探す

偶然に入ったカフェはコミックの聖地であるらし三浦海岸

カフェメイドコスプレをした少女らが笑顔で映る額壁にあり

戦時下も供出拒みし教会の鐘は今なお礼拝告げる

この鐘を鉄砲の弾にさせまじと拒みし牧師は投獄される

キヤンドルの一本ごとに火がともる待降節は特別なとき

続・全集・選集・著作集

新井光雄☆ 東京

講義の声耳にも残る中村元教授の選集三十巻余

「能・狂言」岩波講座の全八巻能みる度の案内の役

観世流の「声の百番」謡曲集CDが付き耳楽します

一仏像一冊とする写真集三十仏ほどモノクロが良し

「都市の論理」そんな言葉に田舎者誘われ買った羽仁五郎集

本人がそこで話しているように読める全集ルイス・フロイス

買つただけ並べただけの著作集武谷三男は三十巻弱

片桐美穂子☆ 神奈川

草木も生氣の萎ゆる猛暑日のつづきて

秋風の待たるる緑の葉の中に芙蓉の花の桃色のぞく

有泉泰子十二年目の夏 高松美智子☆

安定を捨てて転職するという三十五歳山口嵩

きはだちて黄のいろの濃き秋の蝶ひと

り遊べりこの草花に 酒向陸江☆

銀杏の実数多なり常よりも危機を感じてなせる業かも 嶋田正之

ユニークな線生まれると画家は笑む筆持つ利き手の震える日々 ブレイクあずさ☆

惚とはかかることかと自らを笑ひひとではないと叱りぬ 天野克彦

姉川素枝子いつ見ても殻に籠もれるかたつむり心開かぬ類ひか君も 井上菅子

獄死した戸坂潤には畏敬の念著作集には時に黙礼  
飛び飛びにパリを味わい読んだのは森有正の古本全集

後藤恭介☆ 茨城

出席は三回目なり冬雷大会各地の人と友達になる

歌誌経営の難しさ語る編集長の大会挨拶心に沁みる

秋の夜寺島実郎の後援会世界情勢と日本の進路聴く

晩秋に市のバスで行く山梨でリニアカー見学と楽しい宴会

宴のあと同室メンバーと雑談し生活の知恵と生き方学ぶ

「べらぼう」のテレビドラマで江戸を知る出版業界と幕府の圧力  
落葉舞う牛久シャトリーで昼食しワインづくりの苦労を偲ぶ

越澤太朗☆ 茨城

木の間より見え隠れする鳥瓜風に揺られて紅のちらちら

秋深く手繰り寄せたる山葡萄黒真珠のようにつぶつぶ光る

豊作の恵み受けたる「利兵衛栗」ゆでて皮剥き正月祝いに

賞味期限まだまだあると励ましくれる友のお陰で今日も畑に

わが命この世に生きてるありがたさ感謝感謝の日々を送らん  
農の手はまだまだ動くと十本の指グーチヨキパーを繰り返しおり

長谷川 刚 山形

黄葉落とし等のごとき銀杏の木寒さに耐へる冬を迎へむ  
空高く聳ゆる熊野の大銀杏古へ人の思ひが籠る

けふ小雪寒風すさぶため池に鴨身を寄せて寒さを凌ぐ

郵便配達の料金の大幅値上げなどやむを得ぬと思へ廃止よりまし 大山敏夫

今日も終りぬ

今福崎子☆

毎朝に最初に入れるコーヒーが古いの二人の行動スイッチ

数年ぶり友から便りの届きたりされど中味は喪中の欠礼

ドカ雪の朝には除雪車出動し車庫前の雪ダンプで除雪す

大根の葉を切り落とし畑土を分厚くかける越冬大根

凛として夜空に浮かぶコールドムーン影を踏みつつ帰りを急ぐ

長澤千恵子 山形

早起きして寒さ厳しく背を丸め炬燵に入りぬ日がな一日

霜降りて日毎に寒さ強くなり弱き朝日に温み求める

冬さびし寒さ日毎に強くなり物干す指のかじかむ季節

炬燵にて転た寝するは至福にてテレビの音を子守歌とす

枯れ野原に寒波来たりて一夜にて見事変身白に包まる

雪かぶる細き大根抜きとりて納豆おろし朝飯とする

今野澄子 山形

亡き友の呉れし絵手紙見詰めつつコスモス微かに揺れる気がする

窓開けて初積雪は十センチ雪との戦ひ本番となる

旧友と「いい風呂の日」に泊まる宿微醉機嫌で歌ふは校歌

半世紀前の茶道具譲りつつ所作に戸惑ふ孫の苦を聞く

町民の力作展示の芸術祭歌に踊りの多才に見入る

キッキンにはシャコバサボテン華やかに夕餉のおでん沸沸と煮ゆ

難病の治療効果に声弾み友の杖無く歩く夢見る

松田忠一☆ 山形

## 十一月号 十首選

作品二 大塚亮子

信号に停止する位置図らずも木陰に  
りて束の間の幸 梶尾栄子

長かつたなどとは思はぬ米寿なり身体  
に重く歳とたかふ 東 ミチ  
結婚の記念日近し長き時経て今がある  
ケーキを買おう 川俣美治子☆

新聞紙床に広げてじやがいもの皮むき  
する母眼裏にあり 津田美知子

寺庭に小さな秋を見つけたり公孫樹の  
黄葉はや始まりみて 松居光子

言葉にはもうならざれど繰り返す「た  
のむ」の形に唇うごく 藤田夏見☆

丹精をこめて育てしさといもをくれる  
友あり掘りたてですと 小嶋知葉☆

だく二百二十円 呪玉孝子☆  
海面の照り返し受け日焼けした漁師の  
顔に亡き父想ふ 松崎みき子

稻刈りもおほよそ終り庭の柿が色付き  
老いてなほ近視すすむと教へられ眼鏡を二つ注文して帰る  
庭の隅に祖母の植ゑたる栗の木は不作にて生らずばやきつつ拾ふ  
子どもの作文読みて心配す紙と鉛筆不要となりて  
若きころは関心持てず避けをりし郷土史を今楽しく学ぶ

富士登山 河原木光子☆ 広島

## 十一月号 十首選

作品一 石渡静夫

朝まだき大きめの秋の蝶の来て赤き花  
やら草木に移ろふ 飯塚澄子

くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ  
窓の吾れの友達 松中賀代☆

墨を磨り筆を持つこと無くなりて墨の  
香床し書道展を見る 本郷歌子☆

幅広く滝は落ちて轟音は耳に心地よく  
響きおりたり 伊澤直子☆

力まずに草とりをする秋日和土の香の  
立つ草の香もする 永光徳子☆

老いといふ登り坂にさしかかりせめて  
謙虚でありたしこ先 戸部田とくえ

施設にて納涼祭の籤引きに一等賞があ  
る會でなきこと 三好規子

これは夢まなこひらけば平穏の朝のく  
ること知りゐる眠り 佐藤靖子

大きさと姿かたちのめでたくてことし  
の秋刀魚ことは買ひぬ 齋鹿ミヤコ

義父母住み盆くれ行きにし金沢はいま  
墓守るためにゆく町 鈴木計子

朝まだき大きめの秋の蝶の来て赤き花  
やら草木に移ろふ 飯塚澄子

くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ  
窓の吾れの友達 松中賀代☆

墨を磨り筆を持つこと無くなりて墨の  
香床し書道展を見る 本郷歌子☆

幅広く滝は落ちて轟音は耳に心地よく  
響きおりたり 伊澤直子☆

力まずに草とりをする秋日和土の香の  
立つ草の香もする 永光徳子☆

老いといふ登り坂にさしかかりせめて  
謙虚でありたしこ先 戸部田とくえ

施設にて納涼祭の籤引きに一等賞があ  
る會でなきこと 三好規子

これは夢まなこひらけば平穏の朝のく  
ること知りゐる眠り 佐藤靖子

大きさと姿かたちのめでたくてことし  
の秋刀魚ことは買ひぬ 齋鹿ミヤコ

義父母住み盆くれ行きにし金沢はいま  
墓守るためにゆく町 鈴木計子

朝まだき大きめの秋の蝶の来て赤き花  
やら草木に移ろふ 飯塚澄子

くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ  
窓の吾れの友達 松中賀代☆

墨を磨り筆を持つこと無くなりて墨の  
香床し書道展を見る 本郷歌子☆

幅広く滝は落ちて轟音は耳に心地よく  
響きおりたり 伊澤直子☆

力まずに草とりをする秋日和土の香の  
立つ草の香もする 永光徳子☆

老いといふ登り坂にさしかかりせめて  
謙虚でありたしこ先 戸部田とくえ

施設にて納涼祭の籤引きに一等賞があ  
る會でなきこと 三好規子

これは夢まなこひらけば平穏の朝のく  
ること知りゐる眠り 佐藤靖子

大きさと姿かたちのめでたくてことし  
の秋刀魚ことは買ひぬ 齋鹿ミヤコ

義父母住み盆くれ行きにし金沢はいま  
墓守るためにゆく町 鈴木計子

朝まだき大きめの秋の蝶の来て赤き花  
やら草木に移ろふ 飯塚澄子

くらやみの中に外燈二基が建つ眠れぬ  
窓の吾れの友達 松中賀代☆

墨を磨り筆を持つこと無くなりて墨の  
香床し書道展を見る 本郷歌子☆

幅広く滝は落ちて轟音は耳に心地よく  
響きおりたり 伊澤直子☆

作品三 天野 克彦

初めての富士山登山に心躍る霧のぼる中歩みはじめる  
想像の百倍に感じるしんどさに山頂登頂不安のよぎる  
左足こむら返りに不安増す歩みながらも痛み治まらず  
岩場より足の上がらず立ち止まり山頂目指すは断念したり  
雲間より昇る朝日を拝みたり七合目富士一館の前  
吾のザック胸に抱えて下山する夫の背中に深く感謝す  
夜行バス降りてその日の山登り無理なプランと娘の一言  
四回の洗濯終えて初めてのオーブン不要フォカッチャを作る  
ミツスイは長きくちばし花に差し舌は開きて蜜をすくえり

手賀稔子☆ 鈴木裕子☆ 千葉メルボルン

CDは扱い楽で針乗せるあのレコード  
の緊張感なし 新井光雄☆  
命日が迫れば気持ちは過去に行く亡夫  
との日々は鮮明なりて 高藤朱美☆  
たっぷりと脂のりたる秋刀魚焼く大根  
おろす手元軽やか 塚本節子☆  
前にわが住ことあるこのアパート柿  
の皮をむきベランダに干しき

風たちて白きライムの花こぼれ蜜追う鳥のひそと舞い来る  
空港で異国へ来たと思わずになじむ気配のカンボジアの地  
トイレ借り紙はゴミ箱ため水で流し外国に来たと実感

カンボジアの栄枯を見守りガジュマルの根に抱かれてひそむ石像

世界遺産のアンコールワットも暮らしの中人らの声と溶け合いて居る

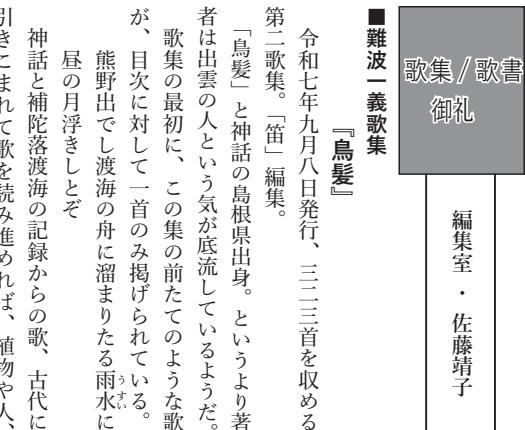
子供にはただで与えてはいけません働いた分だけ払えという國

午前五時明けきらぬ空街灯と同じくらいに照らす満月

早番の明けゆく空によぎるのは谷川俊太郎の詩「朝のリレー」

寒い朝体温と同じ息を吐きマスクの上の眼鏡が曇る

(☆印は新仮名遣い希望者です)



『鳥髪』  
令和七年九月八日発行、三三二三首を収める  
第二歌集。「笛」編集。  
「鳥髪」と神話の島根県出身。というより著者は出雲の人という気が底流しているようだ。  
歌集の最初に、この集の前たてのような歌が、目次に対しても一首のみ掲げられている。  
熊野出でし渡海の舟に溜まりたる雨水に  
昼の月浮きしとぞ

■ 菊谷君代歌集  
『視野が飛ぶ』  
令和七年八月二十八日発行、四二〇首を収めた第六歌集。題名の視野が飛ぶとは、医学用語で見えなくなるの意という。視力低下と文字への愛着がよくよく詠われている。

先ずは題名の歌から。

「視野が飛ぶ」すなはち見えなくなることをいまは忘れて買ふサインペン

文字の歌。

本棚の本の背表紙わたくしの生きるちか  
らを充たすその文字

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

討ち死にをしたごとくに猫と吾と向き  
ばらばらに寝してをり

窓にある月のひかりに寝る猫も横たふ我

わたくしの欲しきものただ一つなり文字

生きるもの、世間つまりこの世のことが詠われ  
ている。

見えはじめ匂ひはじめる味爽のさうびの  
花弁まだ整はず

虫のねに蟬声まじる朝戸出の空には沈む  
満月のある

南天の赤きつぶら実定まれる位置にびつ  
しり一樹に揃ふ

■砂川光子歌集

『具象のないさびしさ』

令和七年九月二〇日、三五五首をもつて刊行の第三歌集。「未来」所属。第一歌集は（日本歌人クラブ九州ブロック優良歌集、宮古毎月新聞社主催第10回平良好児賞）他に（第40回沖縄タイムス芸術選賞 文学部門奨励賞）を受けている。

うりづんといふ季節。  
四月尽太陽ひとつ昇り来てその圧倒に朝  
鳥よろこぶ  
うりづんの風も光もやさしくてわれに障  
りなどもたらしはせぬ

次の歌は敷地内のことと思うが。  
私有地に勾配二十%、十六%の坂道あり  
気が遠くなるような関東平野  
時折は庭先を野兎が駆け抜けるその後を  
真っ黄の貂が横切る  
山の木を手入れしないと…。

願わしきこと。  
しっかりと土踏みしめて歩きたし居室と  
リビングのみの行き来に

太陽、月、風、雨に身が培われているような著者、日に一つの喜びは植木に水をやることという歌もある。光の歌では次のようにも詠う。

著者は中途視覚障害になり明暗が分からずの視力という。色彩は過去の記憶から、聴覚の触覚をたのみにする歌作である。

ひとり額<sup>がほ</sup>ずく

ぐれど二十歳を超えず

著者を守りに守つてくれた夫。  
豊見城の上空はきょうも暮れゆくなあ、  
とうとつに言う夫の視線  
生き難きわが身と思うに君さえやもはや  
追憶のひととなりぬる

安らぎを乱しはせぬかと恐れつつ「りん」の音の澄みわたりたり

「このまま逝つてもいいですか」問うて  
みるあなたの傍はきっと良いところ

■熊谷龍子歌集

「森からの声」

令和七年九月二十日発行の第七歌集で  
三二首を収める。著者が三十二年前に詠した

三七一首を収める。著者が三十七年前に詠んだ一首「森は海を海は森を恋いながら悠久よ

青天の霹靂というは此のことか 朝に夕に仰ぐ稜線が風車予定地とぞ 景觀と人体を脅かす風車十基 は要らない  
春一番 風薰る初夏 虎落笛 人工の風  
に名称は無し

景観と人体を脅かす風車十基 人工の風  
は要らない  
春一番 風薰る初夏 虎落笛 人工の風  
に名称は無し  
玄米が熊に荒らされた歌もあつた。自然を  
ききちらり生かす開発というのは本当に難しく  
声をあげ活動してきた歌人を尊敬する。

著者の住む森はどれくらい広いのだろう、

(遊子堂刊)

